

中国朝鮮族にみる村の生活： 吉林省星火村の調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Korean Chinese inland Korean-Chinese ethnic minorities social change immigrant minorities 作成者: 韓, 景旭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004163

中国朝鮮族にみる村の生活

——吉林省星火村の調査報告——

韓 景 旭*

Village Life of Korean Chinese:
A Social Survey of X. Village in Jilin Province

Jingshu HAN

The purpose of this research is to clarify the present everyday lives of the people of Xinghuo Village, North-East region of China. In undertaking this research, the writer spent a total of nine months in the field on five separate visits between July 1992 and September 1994.

There are currently approximately two million Korean-Chinese living in China. However, notwithstanding the Japanese occupation of the Korean peninsula and the North-East regions of China, there has been little anthropological research by foreigners on this group. As is common knowledge, cultural anthropologists have long searched out distant ethnic groups, especially those isolated from modern civilization, looking for their own romantic/ideal past, as though primitive civilization had continued among them. For this reason, those minority groups which have not been seen as so distanced from “civilization”, such as the Korean-Chinese, have often been avoided in research. Due to this anthropological tradition, not only foreign researchers but also Chinese folk scholars and sociologists are comparatively behind in their research of the Korean-Chinese in comparison to that of other ethnic groups.

From 1940 until 1950, with Chinese foreign and civil wars, and from 1960 through 1970, with the complicated political climate in China, there was a long difficult period for foreign scholars conducting research. However, from the beginning of 1980, with Yunnan province as the focal point, research on various ethnic minorities of the southern regions

* 中京大学, 国立民族学博物館外来研究員

Key Words : Korean Chinese, inland Korean-Chinese, ethnic minorities, social change, immigrant minorities

キーワード : 中国朝鮮族, 内地朝鮮族, 少数民族, 社会变化, 移住少数民族

of China and Tibet has prospered. In this new climate, one wonders why research on a people with a population of two million has not progressed. Amongst the fifty-six ethnic groups in China, Koreans enjoy the highest rate of literacy and education. It is as though because Koreans possess clearly different qualities from "primitive people", research on Koreans has not been that attractive. In addition it is as though the interest shown by many Korean researchers in such Korean traditions as ancestor festivals and the Yangban culture has tacitly been taken to include all Koreans, even though no surveys have been conducted on Korean society in China. In any case, from now on Korean society in China should be an object of sociological and anthropological survey and research.

Based on the current state of research on Koreans indicated above, this study examines the various social changes and adaptations inland Korean-Chinese have experienced as an immigrant minority that has mixed with a variety of ethnic groups, such as the Chinese among others.

はじめに

1. 研究の目的と方法
2. 調査地の概況

I. 家族生活の変貌

1. 生産隊の消滅と「生産責任制」の導入
2. 家族三世代の行方
3. 出稼ぎブームとある中年男性の突然死
4. 困難時の生活保障

II. 農閑期の生活風景

1. 農家の1日
 - a. 川辺屯の金氏家族の場合

b. 北屯の崔氏家族の場合

2. ハルモニ（おばあさん）たちの生活と老人協会
3. 娯楽の王様——マージャン

III. 信仰生活の再開とその背景

1. 朝鮮族社会におけるキリスト教の復興
2. 信者のインタビュー
 - a. 主執事朴氏の話
 - b. 一般信者李氏の話

3. 分析

おわりに

はじめに

1. 研究の目的と方法

現在中国には約200万人の朝鮮族が生活しているが、日本が朝鮮半島や中国東北部を占領した時期を除けば、外国人による朝鮮族社会の文化人類学的調査・研究はほと

んどなされていない¹⁾。周知のように文化人類学は、長い間辺境の諸民族社会、特に近代文明から隔絶された人びとのなかに夢とロマンを追求し、いわゆる未開文化を永遠のものとして捉え続けてきた。そのため、朝鮮族のような文化的距離をそれほど感じさせない少数民族の研究は回避されがちであった。また、このような文化人類学の伝統により、外国人研究者だけでなく、中国国内における漢族の民族学者や社会学者²⁾による朝鮮族研究もほかの諸民族研究に較べて相対的に立ち遅れている。

1940年代から50年代にかけての中国内外の戦争や、1960年代から70年代にかけての中国の複雑な政治情勢により、外国人研究者にとって調査困難な時期が長年続いたことは事実である。ところが1980年代初期から、雲南省を中心とする中国南部の諸民族や、チベット族に関する研究は漢族研究とともに盛んになってきている。こうした状況のなかで、朝鮮族は200万の人口を有しながらもその研究が遅々として進まなかったのはなぜだろうか。朝鮮族が中国56の民族のなかで最も高い識字率と就学率を享有していて、いわゆる「未開民族」(primitive peoples)とは明らかに異なる性質をもっているため、朝鮮族研究自体がそれほど魅力のあるものではなかったのかもしれない。また、多くの韓国研究者が興味を示してきた両班文化や祖先祭祀など朝鮮民族の伝統文化に関しては、あえて中国の朝鮮族社会を研究しなくても、つまり韓国研究だけで十分カバーできると思われていたからかもしれない。いずれにせよ、中国の朝鮮族社会が外国人研究者による調査・研究の対象の1つになるのはこれからと思われる。

これに対し、朝鮮族自身による朝鮮族研究は比較的早い段階から始まっており、1957年夏に延辺大学歴史学部の教師らを中心に「中国朝鮮族歴史調査小組」が組織され、初めて中国朝鮮族に関する学術研究が行われた。だが1960年代から70年代にかけての文化大革命により、朝鮮族研究は長年の間中断されてしまった。その後ようやく研究が再開されたのは、1980年代に入ってからのことである。この時期の朝鮮族研究

1) 日本植民地時代における中国東北部研究に関する総合文献目録として、たとえばアジア経済研究所編集・発行の『旧植民地関係機関刊行物総合目録(満州国・関東州編及び南満州鉄道株式会社編)』[1982]がある。そのほか、末松保和編、東京大学東洋文化研究所発行の『朝鮮研究文献目録』[1972]にも、当時の中国東北部研究に関する文献目録が若干整理されている。なお、在満朝鮮人に関する詳細な調査報告書としては、韓国史料研究所編『朝鮮統治史料(第一巻 間島問題)』や、『朝鮮統治史料(第二巻 間島出兵)』及び『朝鮮統治史料(第十巻 在外韓人)』[1971]所収の「在満鮮人問題」(在奉天日本領事館 赤塚総領事著、大正十年)、「北満在住朝鮮人ノ状況」(在哈爾濱日本総領事館・朝鮮総督府派遣員 林善十郎著、大正十一年)、「大正十一年中ノ北満朝鮮人」(在哈爾濱日本総領事館・朝鮮総督府属 林善十郎著、大正十二年)、「朝鮮人の間島・琿春及同接壤地方移住に関する調査」(末松警視著、大正十五年)などがある。また牛丸潤亮・磨慇編『最近間島事情——附露支移住鮮人発達史——』[1927]においても、「間島朝鮮人」に関する若干の調査報告がなされている。

2) 社会学的な研究が立ち遅れていることに関しては、1952年から1979年3月までの間に中国の各大学での社会学教育が中断されていたことが大きく影響していると言える。

といえば、移民・開拓史や言語、文学、芸術、教育、民俗などに関するもの³⁾がほとんどで、社会学や文化人類学の立場による調査研究は極めて少なく、村落調査や民族誌となれば皆無に近い。

1990年代に入ってから、朝鮮族研究は大きく前進した。1993年から延辺大学東北アジア政治研究所では、年に一卷ずつ朝鮮族に関する近年の研究成果を収録した総合的な学術論文集を出版するようになり、第一巻目の『当代中国朝鮮族研究①』⁴⁾には、朝鮮族に関する政治、経済、教育、宗教、風俗習慣、言語などに関する16篇の論文と資料が収録されている。だが、収録されている論文のほとんどは「延辺朝鮮族」のみを研究対象としたものであり、延辺朝鮮族自治州以外の地域において、漢族と混住している内地朝鮮族（筆者はこれを「延辺朝鮮族」とは区別するために「内地朝鮮族」と呼んでいる）に関する研究はほとんどなされていない。

筆者は1992年からこれまでに、「移住少数民族」(immigrant minorities)であり、なおかつ漢族など異民族と入り交じって生活する「混住少数民族」である内地朝鮮族が、いかにさまざまな社会変動を体験しながらホスト社会に適応してきたかについて調査を重ねてきた。それらの調査を踏まえつつ本稿では、中国吉林省永吉県の一朝鮮族村落における生活の実態の一部を明らかにし、内地朝鮮族の研究に一つの手がかりを提供したい。

本稿は「はじめに」と「おわりに」のほかに3つの章から構成されている。第Ⅰ章「家族生活の変貌」では、1949年に中華人民共和国が成立する頃から今日に至るまでの生業組織の変遷と1983年に実施された「生産責任制」について記述し、その間における家族三代の居住地や職業の変化、及び「生産責任制」が実施されてから急増した出稼ぎについて報告する。第Ⅱ章「農閑期の生活風景」では、「生産責任制」以降に現れた9ヶ月にも及ぶ長い農閑期⁵⁾における村びとたちの暮らしぶりをスケッチし、集団農業のシンボルであった生産隊組織が解体した後には再組織された数少ない社会組織の1つである「老人協会」について記述する。第Ⅲ章「信仰生活の再開とその背景」では、1970年代末から朝鮮族社会に再び現れたキリスト教信仰について若干の

3) たとえば歴史に関する研究としては朴昌昱等 [1986]、教育に関する研究としては朴奎燦等 [1991]、文学や芸術に関する研究としては趙成日等 [1982] や任範松等 [1989]、民俗に関する研究としては鄭吉雲 [1982] を挙げることができる。

4) 詳しくは金東和・金承哲等 [1993] を参照せよ。

5) 1983年に集団農業から請負制農業（「生産責任制」）に移行して以来、農業における生産性は著しく向上し、星火村では年間の実質就労時間が3ヶ月までに短縮してしまった。一時的な現象ではあるが、筆者が調査地を訪れた頃の村民の最大の課題は、如何にして9ヶ月もある暇を消化するかであった。

考察を行う。

研究方法として、1992年7月から1995年9月までの間に、6回に分けて計10ヶ月余りの実地調査を行い、筆者が朝鮮族であり現地語には完全に通じていた利点を生かし、聞き取り調査の方法を最大限に活用した。ただ、筆者の都合により、大学の休み期間とはば一致する1、2、3月と7、8、9月にしか調査地を訪れることができなかったことは、民族誌学的な調査を行うにあたって些か不利であったと言わざるを得ない。だが筆者は同一地域の朝鮮族として、対象文化には初めから通じていたため、調査期間の不足による落ち度は避けられたように思っている。それに、研究の目的ではなかったが今から約10年前（1981-1984）に、3年間にわたって合計10数回も友人宅を訪ねて調査地に足を踏み入れていた経験は、短い調査期間でなされた本研究を補ってくれている。

ところで、調査者が対象文化に精通していることはフィールドワークに有利であると同時に、また自明なものとして看過してしまう事柄が多いため、場合によってそれが不利な要素になることもある。そこで筆者は、調査結果をそのつど周囲の日本人研究者たちに報告することで問題克服に努めた。また調査にあたっては、近年の中国社会は農村を含めて急激な社会変動期にあるため、調査と同時進行の社会変化に徹底的に注目して毎回の調査に臨んだ（詳しくは「おわりに」を参照）。

調査が一段落した今に思えば、筆者は対象社会について以前から比較的詳しくかったにも拘わらず、現地生活に溶け込むまでにはさまざまな努力を必要とした。現地生活に溶け込むことは、具体的には現地の人びととの付き合いによって実現されるものである。ここでいう「付き合い」とは、現地の人びとと一緒にたむろしながら「無駄」な時間を過ごすことであり、また調査者が調査地の人びとに対して後述するようなサービスを行うことである。

調査地の人びとに対するサービスには、金銭的なものと情報提供の形をとるものが含まれる。金銭的なサービスとは、子どもたちにアイスクャンデーを買ってやったり、訪問宅にプレゼントを持参したり、村びとのために大量の写真撮影を無料で行ったり、現地で知り合い親しくなりかけた人たちを料理屋に招待したり、貧しい家の患者の医療費を分担したり、または村びとの誕生日などに他人よりふ厚い現金袋を渡したりするなどの行為によって具現される。そして情報提供とは、現地の人たちから受けるあらゆる質問に快く応え、情報交換におけるバランスをとることである。これらのサービスのほかにも、ごく単純なことではあるが、筆者は子どもたちが喜ぶような玩具や使用済みのテレホンカード及び手品道具などを日本から持参し、細かいところで村び

とを楽しませることを怠らなかった。

上に挙げた一連のサービスのほかにも、付き合いにはさまざまな技術が必要であることは言うまでもない。現地入りを果たし、最初のインフォーマントとの用事をひと通り済ませたあと、早いうちに村の長老格や村長などの幹部の家を訪問することは、次回の調査を有利に進めるに当たって欠かせないことだとわかった。また、例外なくすべての家庭を訪問する世帯調査の場合は別とし、ほかの目的で一般の村びとの家を訪れることは、付き合いのバランスを崩す恐れがあるため特に注意を必要とした。言うなれば、最初に知り合った人や同年代の人、村長など村の有力者、皆の威信を集めている人などの家にはある程度頻繁に出入りしてもよいが、それなりの理由もなく、ただ道端で食事と呼ばれたからといって気軽について行ってしまうと、後にはかの村びとから妬まれる場合があるのだ。

調査者が現地の人びとに無視されたりして惨めな気持ちにならないために、そして長期にわたって現地の人びとと上手に付き合っていくためには、少なくとも上に述べたような事項にまず気を配る必要があることを、筆者は最終的に認識するにいたったのである。

2. 調査地の概況

朝鮮族は中国の東北三省において人口の最も多い少数民族の1つである。かれらの大部分は未だに伝統的な稲作農業に従事しており、広大な河川流域の農村地帯に集落をなして暮らしている。集落の基本単位である「屯」は、単一民族によって構成される場合もあれば、また複数民族によって構成される場合もある。だが行政村については、基本的に民族別な編成がなされている。

調査地の星火村は、吉林省永吉県樺皮廠鎮に属する朝鮮族行政村であり、川辺屯・北屯・東屯の3つの部落（いずれも仮名）から構成されている。

永吉県は、24の郷（元人民公社）・鎮（行政的に郷と同格）により構成され、樺皮廠鎮はそのうちの1つである。樺皮廠鎮はまた、2つの朝鮮族行政村（星火村はそのうちの1つ）を含む26の行政村（うち、漢族部落が53、朝鮮族部落が13）を管轄している。

永吉県には、1985年の時点で約43,000人（全人口の約5.8%）の朝鮮族が居住しており[樺皮廠鎮誌編纂委員会 1986: 123]、県内には多数の朝鮮族学校（うち、高等学校が4つ）がある。星火村内には、朝鮮語だけで教育を行う小学校が北屯内に設置されており、星火村内の子供たちの大部分はそこに通学している。卒業後に付近の漢族

中学校へ進学する者はほんの数パーセントで、県内もしくは吉林市の朝鮮族中学・高校に進学する者が大部分であると星火村長は語ってくれた。

樺皮廠鎮センター⁶⁾は、吉林市の西北端から約 35 km 離れた地にあり、長春—図門線鉄道と長春—吉林間の省道が北屯のすぐ側を通っている。北屯の側にある樺皮廠鉄道駅から各周辺部落や樺皮廠鎮センターまでは、数年前からロバやラバ、馬などが引くホロ付きの「ロバタク」が毎日、朝から夕方まで汽車のダイヤに合わせて行き来している。

星火村における朝鮮族の総人口は約800人（約200世帯）で、そのうち川辺屯の人口は漢族を含めて302人（70世帯、うち漢族が5世帯）である。北屯は約80世帯の朝鮮族と約200世帯の漢族とから構成され、東屯は朝鮮族（約50世帯）のみで構成されている。なお漢族は、北屯と川辺屯において朝鮮族と混住しており、行政的には別の「村」に属している。

1992年7月にアンケートと面接調査を行った川辺屯70世帯の人口を世代別にみると、20代の人口が67人と最も多く、60才以上の人口はわずか25人で全体の6.6%を占めるのみである。70才以上の人口では女性が7人（うち、漢族が2人）で、男性はわずか3人（うち、漢族が1人）である。10才未満の子供は38人で、10代や20代の人口より少ないのは、ここ10年余りの政府による「1人っ子政策」が確実に功を奏していることを示している。

1世帯当たりの家族成員数では4人家族（26世帯）が最も多く、1世帯当たりの平均人数が約4.3人となっている。近年、1世帯当たりの平均人数が減ってきたとはいえ、1992年7月の調査時点で9人家族がなおも2世帯あった。

結婚年齢別人口では満20才から25才の間で結婚した者が最も多く、全結婚者数の75%以上を占めている。初婚年齢の下限は女性が15才で男性が18才となっており、上限は女性が30才で男性が36才となっている。なお10代で結婚した者は、全員が解放（1949年）前に結婚している。

離婚について調べた結果、既婚者数150人のうち、離婚もしくは再婚を経験した者は漢族女性に1人あるのみであった。夫の飲酒やギャンブルなどで夫婦喧嘩が多いにも拘わらず、同屯の朝鮮族の間で離婚者や再婚者が皆無であることは、朝鮮族農民が今もなお離婚を人生における最大の失敗もしくは恥の1つだと考えているからである。

学歴別の人口では、小学校を卒業もしくは中退した者が55人（うち、「満州国」時

6) 鎮センターとは鎮政府の所在地であり、商工業の中心地でもある。なお樺皮廠鎮センターは、川辺屯から約 1.5 km 離れている。

代の日本人小学校に通ったことのある者が3人)、中学校を卒業もしくは中退した者が137人、高校を卒業もしくは中退した者が43人、中専(2年制大学)を卒業した者が6人、大学卒業者が2人(うち、現役1人)、無学歴者が18人となっている。

朝鮮半島から中国東北部に移住した移民一世の渡来年を面接調査で調べた結果、1910年代に2世帯、20年代に8世帯、30年代に21世帯、そして40年代に23世帯と最も多いことがわかった。また、今日の川辺屯の住民が同屯に定着した年代はそれぞれ違っており、大部分は1950年代から70年代にかけ、他屯から移住してきた者である。

漢族5世帯のうち、1世帯だけが1910年代からずっと川辺屯に居住しており、残りの4世帯はいずれも1980年代以降に入屯した人たちである。上記5世帯のうち、1世帯だけが今でも農業に従事しており、残りの4世帯は川辺屯近くの樺皮廠鎮センターにある工場に通勤している。本人たちの話では、家賃や土地代が安いなどの理由から、住居だけを川辺屯に構えているとのことであった。

川辺屯70世帯(漢族5世帯を含む)を戸籍別に分類すると、家族員の誰かが星火村の戸籍をもっているのが60世帯、そのうち、「農戸」つまり家族全員が農村の戸籍をもっているのが53世帯、「半農戸」つまり家族員の誰かが都市の戸籍をもっているのが7世帯あった。そのほか、付近の漢族村の戸籍をもっているのが3世帯、他県の朝鮮族村の戸籍をもちながら川辺屯に臨時的に居住している朝鮮族が3世帯、川辺屯に居住しながら都市の戸籍をもっているいわゆる「非農戸」が4世帯あった。

調査地の選定には、対象村の規模や性格よりもむしろそこにコネクションをもっていること、つまり調査をより効果的に進め得る条件が最優先されたが、星火村は経済発展の度合などからして、ごくありふれた朝鮮族行政村の1つである。

I. 家族生活の変貌

1. 生産隊の消滅と「生産責任制」の導入

朝鮮族が今日の樺皮廠鎮内に居住していたことに関する最古の記録は、1929年(中華民国18年)までに遡る。当時樺皮廠一帯には、移住外国人として34世帯(215人)の朝鮮人と3世帯(6人)の日本人が居住していた。これらの朝鮮人の大部分は、今日の延辺地区から移住してきた人たちで、当時の川辺屯一帯には朝鮮人が1人も住んでいなかった[樺皮廠鎮誌編纂委員会 1986: 42]。

1931年(昭和6年)の「九・一八」事変(満州事変)勃発以来、日本軍は中国東北

部を占領支配し、日本人は数年の間に今日の樺皮廠鎮センター付近に3つの工場⁷⁾を建設した。当時、今日の吉林市内に住んでいた安基元という朝鮮人が、現在の樺皮廠鎮センターの東外れにある川辺屯にやって来て広大な泥炭地を購入し、当屯初の朝鮮人地主となった。

1933年、朝鮮半島の江原道に住んでいた金氏家族とほかの朝鮮人二家族が川辺屯に移住し、安氏の小作農として働きはじめた。こうして川辺屯には初めて朝鮮人が定住するようになり、後に北屯や東屯にも及んだのである。

当時の川辺屯に約10世帯ほどあった漢族⁸⁾は、次々と入植する朝鮮人に対して農地を貸与し、それによって同地域では初めて水田耕作が行われるようになった。それまでに稲作を経験したことのない地元の漢族は、自分たちの畑が絶えず浸水していくのを目の当たりにし、当初は非常に当惑したという。だが、やがてかれらは水稻の米の美味しさを知り、ますます積極的に自分たちの畑を朝鮮人に貸し付けるようになった。漢族が朝鮮人の家に招かれて食事をすると、茶碗で7、8杯のご飯をおかずもなしに奇麗に食べてしまったというほどだから、当時の漢族にとって、白い飯が如何に美味しいものであったかが想像できる。こうして漢族の畑は次第に水田と化し、朝鮮人の戸数も着実に増えていった。

米の美味しさには惹かれたものの、漢族が稲作技術を習熟するまでには相当長い年月を必要とした。春や秋頃の川水のまだ冷たい季節に、朝鮮人が素足で田圃のなかで働いているのをみて、漢族農民は「足が冷たくないのか」といつも不思議そうに聞いていたという。結局、周辺地域の漢族が本格的に稲作農業に従事するようになったのは今からやっと20年前のことである。ちなみに今日における漢族の稲作技術は、朝鮮族のそれと全く変わらないほどに向上している。

1945年に日本軍が中国本土から撤退しはじめてから、川辺屯の朝鮮人も漢族の報復行為を恐れて一時的に各地へ退散した。というのは、日本占領下にあった中国では日本人が「一等公民」、朝鮮人が「二等公民」、そして中国人は「三等公民」として順位づけられ、朝鮮人は日本人の庇護下に置かれながら日本人に協力したからである。そのことにより、1945年から1949年の間、つまり国民党軍が活躍していた時期において、数多くの朝鮮人が漢族によって殺害奪掠されたと言われている。

中華人民共和国が成立する一年前の1948年に、中国東北部では共産党や人民解放

7) 3つの工場とは豆桔株式会社、樺皮廠精米所、満州東洋紡績株式会社のことである。

8) 1930年代初期まで川辺屯には、約10世帯の漢族のみが居住していたと最初の朝鮮族移住者は語ってくれた。

軍による土地改革が行われた。具体的には地主から土地や家屋敷、生産用具等を強制的に取りあげ、小作農を中心とする貧しい農民たちに分配した。ところが、各家庭における労働力や分配された生産用具の不均衡により、一家だけの力では正常な生産活動が行えない家も多く存在した。そこで登場したのが「互助組」という相互扶助組織であり、田植えや刈り入れ、穀物の運搬などの生産活動を、数戸の農家からなる「互助組」の力で成し遂げた。

1953年頃から、中国の農村では大規模な農業協同化が進められ、まずは半社会主義的な性格をもつ集団経済組織の「初級社」(「初級農業生産合作社」)⁹⁾が組織された。同組織に加入するか否かは名目上は各人の自由意志によるものとされたが、政府機関の宣伝や説得により、数年後にはほとんどの農家がこれに加入した。

1956年頃には、土地やそのほかの主な生産手段をすべて共有制にする「高級社」(「高級農業生産合作社」)¹⁰⁾が組織され、農業生産における協同化・集団化のレベルは一段と引き上げられた。星火村ではまず「互助組」が「初級社」に改編され、「初級社」はその後「生産隊」に変身していった¹¹⁾。このように労働力や生産手段および資本を1ヶ所に集中させることにより、星火村における農業の生産性は以前に比べて大きく向上した。

ところが、このような初級レベルでの集団化の基礎がまだしっかり固定していない1958年頃に全国各地で人民公社¹²⁾化が進められ、協同化のレベルはさらに引き上げられた。農業生産の協同化・集団化が進むにつれ、それまでに盛んだった農家の副業(筵編みや養豚など)は一切禁止され、家庭単位で生産活動を行うことを資本主義的なやり方と見做して徹底的に排除した。一方、消費生活の面では絶対平等主義的な配給制が適用され、一時は生産隊の全員が無料で食事のできる「全民食堂」が開設されるほどであった。そのほかにも、人民公社化による物資の無償徴発や農民個人の利益

9) 「初級社」は、農業協同化の過程でつくられた半社会主義的な性格をもつ集団経済組織である。一般に20～40世帯から構成され、後に再編される「生産隊」の基礎となる。各家庭からは土地や役畜、馬車などをそれぞれ出資し、経営は統一して行い、集団で働き、労働と出資に応じて報酬を受けた。なおこの段階では、土地やそのほかの主な生産手段の所有権は各個人にあるものとされた。

10) 「高級社」は、農業の集団化過程でつくられた社会主義的な性格をもつ集団経済組織である。一般に3～10の「初級社」から構成され、後に再編される「生産大隊」の基礎となる。この段階では、土地や役畜、大型農具などは集団が一定の値段で買い取り、所有権は集団にあるものとされ、報酬は労働に応じて分配された。

11) 1983年に川辺屯では、国の政策にしたがい「生産隊」を「社」に改名した。

12) 「人民公社」は、1958年頃に「高級農業生産合作社」約10社が連合して生まれた行政と経済が一体化した組織である。当時その数は全国に約54,000あった。なお1公社あたりの平均世帯数は3,000あまりで、後に再編される「郷」の規模に相当した。

の侵害といった事件も多発した。その結果農民の労働意欲は低下し、1950年代末から1960年代初期にかけての、農業生産における大幅な損失を招いた。

1960年代初期からは過去の間違った政策に対する手直しが行われ、人民公社の高すぎた協同化のレベルを再び引き下げるようになった。具体的には生産と分配をめぐって人民公社は生産大隊を管理し、生産大隊はさらにその下の生産隊を管理するといった、いわゆる「三級所有」制が導入され、人民公社の代わりに、より規模の小さい生産隊を基本採算単位とする体制を整えた¹³⁾。この改革により、盲目的かつ急進的な「左」寄りの誤りが完全に払拭されたわけではなかったが、それでも「三級所有」のシステムは、比較的当時の農村の実情に即していたため、農業生産は着実に好転した。

だが、そのような好調期も長くは続かなかった。1966年から中国全土で始まった「文化大革命」により、「左」寄りの誤りが再び深刻化し、農業生産の発展は再び停滞した。食糧不足で糠まで食べるようになったこの時期において、各朝鮮族村では再び筵編みや養豚などの家庭内副業が復活し、1970年代にはかつてない副業の全盛期を迎えた。

1978年12月、鄧小平の指導の下に北京で開催された中国共産党の「第十一届三中全会」は、中国の歴史における重要な転換点となった。総会開催中とその後に「農業発展の加速化に関する決定」がなされ、「農業生産責任制」¹⁴⁾の強化や整備を謀り、農村における多角経営を積極的に発展させる政策と措置が定められた。そのほかにもまた「農村活動会議記録要綱」などの重要文章が発表され、農業生産の発展が遅すぎる

13) 川辺屯の農民は第2と第5生産隊に編成され、吉林省永吉県樺甸人民公社星火生産大隊の管轄下に置かれた。なお同生産大隊は第1、第2、第3、第4、第5生産隊により構成され、第1と第3生産隊は北屯に、第2と第5生産隊は川辺屯に、第4生産隊は東屯にそれぞれ設置された。

14) 「生産責任制」は、生産隊と農民との間で生産請負契約を結び、双方の権利や責任、利益などを規定し、期限通りに契約を履行するという生産システムである。その基本的な特徴は、一に分散的経営を実施していること、二に生産高に応じて報酬を計算することである。

請負契約は、個人単位もしくは世帯単位でもよく、また数人が自由意志に基づいて作ったグループでもよいとされている。なお請負の規模は、作物の違いや技術レベルなどに応じて決められる。農民たちには世帯(家族)単位の経営の伝統や経験があるため、世帯単位の請負形態が最も多く見受けられる。契約時には、一般に請負者がどれだけの農地や生産量を請け負い、生産隊がどのような条件を提供し、かつ生産物をどのように分配するかなどが話し合われる。

請け負った農地における生産活動は、すべて農民の自主裁量と計画によって行われるため、生産隊長が生産の指揮をとり、労働時間・量によって報酬を計算するといった過去のやり方に比べて大変大きな変革といえる。

報酬を計算する方法はさまざまだが、典型的なのはやはり農民が農業生産を全面的に請け負い、年間収入から農業税や供出食糧を納め、さらに公共積立金と共益金を差し引き、その余剰を個人のものとするというやり方である。これには責任がはっきりしており、手続も簡単で、たくさん働けば収入もそれだけ増える点が歓迎されている。

などの指摘がなされた。

以上のような新しい農業政策により、労働成果の分配では悪平等が克服され、農民は以前よりはるかに強い労働意欲を示すようになった。また農村経済は総合的な発展を目指し、食糧生産だけでなく、工業や商業、養殖業なども重視されるようになった。

1982年12月、「第五期全国人民代表大会第五次会議」において採択された新憲法により、政経一致の人民公社制度はついに廃止された。その翌年星火村では、集団農業の象徴であり、かつ農民にとって最も身近な自治組織であった「生産隊」がついに消滅した。それにより、従来の厳しい集中管理方式の代わりに分散的経営方式の「生産責任制」が採用され、国家が所有し、生産隊が実質的に運営、管理してきた土地などの主な生産手段は、期限（15年）や納税（収穫量の2割）などの条件付きで各農家に貸与された。そして、「自留地」と呼ばれる水稻以外の穀物や野菜類を栽培する少量の畑や、「口糧田」¹⁵⁾ と呼ばれる一部の田圃は納税の対象から外された。農民が自主的に開墾した耕地に対しては、3年間にわたって納税の対象から外し、自主的に植林して得た木材に関しても自由販売を認めるなどの優遇策を設け、農民の労働意欲を大きく掻き立てた。

星火村長の話によれば、星火村の現有水田面積は約2,000ムー（1ムー＝1,000m²）である。これには、1949年以降に国から割り当てられた耕地のほかに、自主的に周辺の荒地を開墾して新たに増やした自主開墾の耕地も含まれる。新たに増やした約4割の耕地については、政府に報告せず隠蔽しているという意味で「黒地」（ヘイティ）¹⁶⁾ と呼び、納税の対象から外されている。なお朝鮮族農民たちの話では、周辺の漢族村には星火村より隠しもっている「黒地」が遙かに多いという。また、朝鮮族農民が自主的に耕地を増やしてきたとはいえ、人口の増加速度が耕地拡大の速度を遙かに上回っていたため、星火村における1人当たりの耕地面積は実質的に減少の一途を辿ってきたと村長は語っている。

「生産責任制」が実施されて以来、農業生産は基本的に家族単位で行われるようになったが、それでも農民たちは過去の経験に基づき、ときには村政府が個々の農家を

15) 「口糧田」は、家族1年分の米が生産できる最小限の水田（漢族の場合は旱田を含む）であり、一般的に各家庭が所有している全水田面積の約3分の1を占める。これに対して、納税の対象となる水田のことを「責任田」と呼び、1ムー（1,000m²）毎に約350kgの穀を供出糧食として、通常より安い値段で国家に販売しなければならない。

16) 村周辺の荒地はすべて国有であるが、集団農業時代において村びとが共同で開墾した耕地については、村の共有耕地（「黒地」）として国家が黙認している。なお、個人が自主的に鉄道沿いや山麓などに点々と開墾した小規模の耕地のことについては「小片地」と言い、これもまた国家によってある程度認められてきた。

組織し、一農家だけの力では解決しがたい問題、たとえば農業基本建設や社会福祉事業、防災事業、農作物における品種改良などの問題に対処してきた。ところが、それぞれの農家の実情により、実際には上のような協同作業が必ずしもうまく進んでいないのが現状である。

たとえば「生産責任制」が実施されてからも、農民が地域の道路工事や水利事業などに協力することは義務付けられている。ところが近年は、都市や外国へ出稼ぎに行った者が多いだけでなく、農業そのものを放棄してしまった者も多い。諸工事に必要な人手を集めることが困難になっているほか、農地の荒廃まで進むようになった。

北屯を例にみると、数年前の水不足をきっかけに約200ムーの水田が一度に荒廃してしまった。鎮政府の役人が視察に来て、それらの農地からはもはや何の穀物もとれないことを認め、荒廃した土地を納税の対象から外してくれた。その後一部の農民たちが、干上がった水田に大豆など油料作物を試作したが、地勢が低いと、雨水が急に流れ込んだりして結局は失敗した。

北屯の農業はすでに崩壊する寸前にまで来ている。1991年に鎮政府から12万円の救援金が支給され、地下水を汲み上げる工事が行われたが、結局は一滴の水も汲めず、井戸掘り工事はとうとう失敗に終わった。1992年の質問調査では、翌年も農業を続けると答えた世帯が全体の25%にも満たなかった。ここ数年は、政府からの救済糧として玉蜀黍が支給されているが、「何十年にわたって真っ白な米だけを国に捧げ続けてきたのに、いざとなったら、われわれに玉蜀黍しかくれないのか」と、現地の朝鮮族農民たちは怒りをぶつけていた。

生産隊がまだ存在した集団農業時代には、行政兼生産組織としての生産隊（隊長、副隊長、婦女隊長、会計、出納係などの役員から構成される）のほかに、自律的な社会組織として「婦女会」や「青年団」、「読報組」（今日の「老人協会」に相当）などがあった。「婦女会」では、しばしば中年の女性を中心メンバーとなり、田植えや刈り入れが終わった頃や「名節」などの日に集まって酒を飲んだり、踊ったり、歌ったりしたものである。そして若者の組織であった「青年団」もまた、定期的に集まってスポーツなどさまざまな文化行事を行ってきた。

ところが生産隊の解体とともに、年寄りの娯楽組織である「老人協会」（詳しくは第Ⅱ章2節を参照）を除くその他の組織はすべて消滅した。現在では、かつての互助組織に代わるものとして、マージャン仲間などの小グループや親戚¹⁷⁾ ネットワー

17) 朝鮮族は、韓国で父系同族を指す「門中」という言葉こそ知らないものの、「一家」（イルガ・チバン）や「親戚」などの言葉を用いて父系親族のつながりを強調している点では今日ノ

クが若干機能しているのみである。仲間や親戚（姻戚を含む）同士が親近感をもって互いに助け合うのは、主に赤ん坊の満1才誕生祝いのときや若者の結婚式、年寄りの誕生日、葬式および家屋の修築などのときである。日頃から仲よく付き合っているマージャン仲間のはほとんどは同村に住んでいるが、親戚関係にある者に関しては遠く他県に住んでいる場合も多い。結婚式や年寄りの誕生日などには、親戚に協力するために遙々と汽車に乗って応援に駆け付ける。

2. 家族三世代の行方

上に述べた農業生産様式の変遷は、各世代の生業構造にもさまざまな影響を与えた。そこで本節では、北屯における家族三世代の現住地や職業に関する面接調査（1994年8月）のデータを基に、職業の世代内及び世代間移動の現状を分析してみたい¹⁸⁾。

筆者は調査対象を選定する際に、対象を第一世代が長男（幼児期に死亡した場合は次男）である世帯だけに絞った。なお北屯には、長男が第一世代である世帯が全部で7世帯あった。ほかの世帯を避けた主な理由は、第一世代がまだ比較的若いため、孫世代が形成されていなかったり、または幼な過ぎたからである。

なお調査内容には、次の3項目が含まれている。

- A. 第一世代：第一世代（長男）のキョウダイの現住地と現状況。
- B. 第二世代：第一世代（長男）の子女の現住地と現状況。
- C. 第三世代：第一世代（長男）の長孫キョウダイ（長子の子どもたち）の現住地と現状況。

（1）姜氏家族

A. 第一世代

1) 長男（57才）

現住地：永吉県樺皮廠鎮星火村。

現状況：北屯内でサイダー工場を経営。

2) 次男（49才）

現住地：星火村。

現状況：農業生産のかたわら、養魚池を経営。

3) 長女（43才）

¹⁸⁾ の韓国と同じである。

18) プライバシーの保護のため、ここでは家族員の名前をすべて省略した。

現住地：樺皮鎮新勝村（朝鮮族行政村，婚出）。

現状況：農業生産のかたわら，長兄とともに養魚池を経営。

4) 三男（34才）

現住地：遼寧省瀋陽市。

現状況：朝鮮料理屋を経営。

5) 次女（29才）

現住地：吉林省長春市（婚出）。

現状況：某国営企業に勤務。

B. 第二世代

1) 長男（28才）

現住地：星火村。

現状況：鎮センターで個人タクシー（1985年式の日産ブルーバード）を運転。

2) 次男（25才）

現住地：吉林市。

現状況：個人タクシー（ポーランド製乗用車）を運転。

3) 三男（22才）

現住地：星火村。

現状況：未婚，農業生産のかたわら，父親とともに養魚池を経営。

C. 第三世代

1) 長男（4才）

現住地：星火村。

現状況：在宅。

(2) 金(a)氏家族

A. 第一世代

1) 長男（62才）

現住地：星火村。

現状況：鎮センターの某朝鮮料理屋で従業員として勤務。

2) 次男（58才）

現住地：星火村。

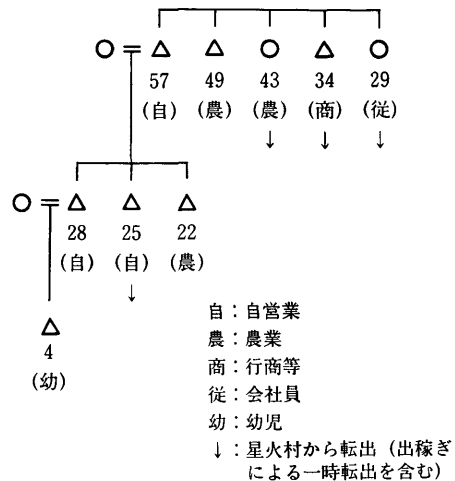


図1 姜氏家族

現状況：農業生産のかたわら，
北屯で冷麺加工工場を
経営。

3) 三男 (55才)

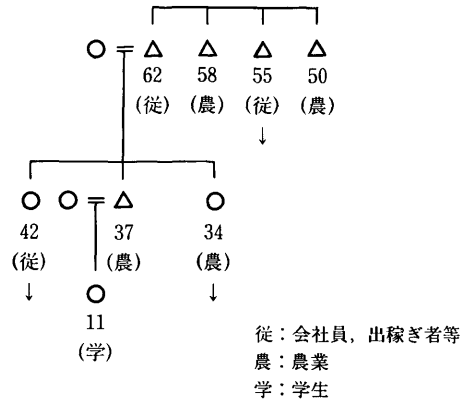
現住地：吉林市。

現状況：某冶金研究所で技術研
究員として勤務。

4) 四男 (50才)

現住地：星火村。

現状況：農業生産のかたわら，
トラックを運転。



B. 第二世代

1) 長女 (42才)

現住地：吉林市 (婚出)。

現状況：某国営企業に勤務。

2) 長男 (37才)

現住地：星火村。

現状況：農業生産に従事。

3) 次女 (34才)

現住地：永吉県河湾子鎮の某朝鮮族村 (婚出)。

現状況：農業生産に従事。

C. 第三世代

1) 長女 (11才)

現住地：星火村。

現状況：星火村朝鮮族小学校 (3年) に通学。

(3) 朴氏家族

A. 第一世代

1) 長女 (70才)

現住地：韓国全羅南道 (生涯を通して朝鮮半島に居住)。

現状況：在宅。

2) 長男 (68才)

現住地：星火村。
現状況：農業生産に従事。

- 3) 次男（66才）
現住地：遼寧省瀋陽市。
現状況：キムチを製造・販売
（出稼ぎ，行商）。

- 4) 次女（61才時に死亡）
原住地：星火村。

B. 第二世代

- 1) 長男（47才時に死亡）
原住地：星火村。
- 2) 長女（43才）
現住地：永吉県双河鎮朝鮮族村
（婚出）。

現状況：農業生産に従事。

- 3) 次男（41才）
現住地：吉林市。
現状況：某国営企業でトラックを運転。
- 4) 三男（37才）
現住地：黒龍江省チチハル市。
現状況：某国営企業でトラックを運転。

- 5) 次女（32才）
現住地：吉林省蛟河県の某朝鮮族村（婚出）。
現状況：農業生産に従事。

C. 第三世代

- 1) 長男（23才）
現住地：広東省広州市。
現状況：某韓国系企業で通訳を担当（出稼ぎ）。
- 2) 長女（20才）
現住地：遼寧省瀋陽市。
現状況：某朝鮮料理屋で従業員として勤務（出稼ぎ）。
- 3) 次女（18才）

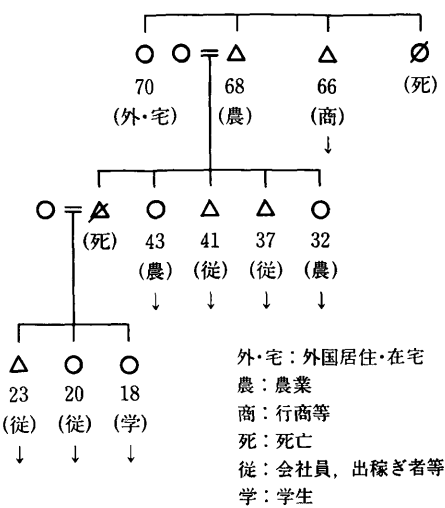


図3 朴氏家族

現住地：吉林省永吉県江密峰鎮（学校の寮）。

現状況：鎮立朝鮮族高等学校（2年）で勉強中。

（4）李（a）氏家族

A. 第一世代

1）長男（75才）

現住地：吉林市。

現状況：某国营工場でガードマンとして勤務。

2）次男（73才）

現住地：韓国慶尚南道（韓国に居住）。

現状況：在宅。

B. 第二世代

1）長女（48才）

現住地：吉林市（婚出）。

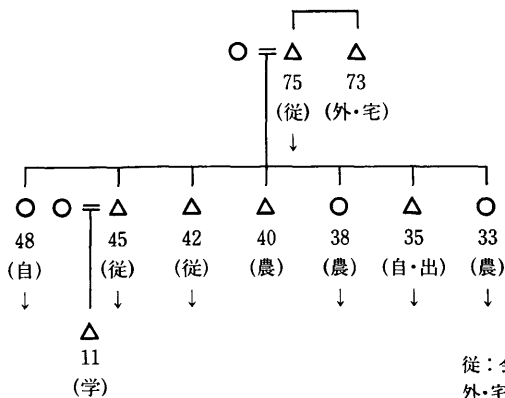
現状況：小さな個人企業を経営。

2）長男（45才）

現住地：吉林市。

現状況：某電熱供給会社に勤務。

3）次男（42才）



従：会社員
外・宅：外国居住・在宅
自・出：自営業・出稼ぎ
農：農業
学：学生

図4 李（a）氏家族

現住地：吉林市。

現状況：某運輸会社で倉庫の管理員として勤務。

4) 三男 (40才)

現住地：星火村。

現状況：農業生産に従事。

5) 次女 (38才)

現住地：永吉県河湾子鎮某朝鮮族村 (婚出)。

現状況：農業生産に従事。

6) 四男 (35才)

現住地：遼寧省瀋陽市。

現状況：朝鮮料理屋を経営 (出稼ぎ、自営業)。

7) 三女 (33才)

現住地：永吉県西陽郷某朝鮮族村 (婚出)。

現状況：農業生産に従事。

C. 第三世代

1) 長男 (11才)

現住地：星火村。

現状況：星火村朝鮮族小学校 (3年) に通学。

(5) 李 (b) 氏家族

A. 第一世代

1) 長女 (76才)

現住地：日本 (戦前に朝鮮半島から渡日)。

現状況：不明。

2) 長男 (72才)

現住地：星火村。

現状況：在宅。

3) 次男 (65才)

現住地：韓国。

現状況：不明。

B. 第二世代

1) 長男 (52才)

- 現住地：遼寧省瀋陽市郊外。
 現状況：農業生産に従事。
- 2) 長女 (48才)
 現住地：吉林市 (婚出)。
 現状況：野菜販売店を経営。
- 3) 次男 (42才)
 現住地：天津市。
 現状況：某韓国系企業で従業員として勤務 (出稼ぎ)。
- 4) 三男 (39才)
 現住地：吉林省延边朝鮮族自治州龍井市。
 現状況：某国営企業で電気工として勤務。
- 5) 四男 (37才)
 現住地：永吉県口前鎮。
 現状況：朝鮮族第一中学校の教師。
- 6) 次女 (35才)
 現住地：永吉県土城子満族・朝鮮族郷 (婚出)。
 現状況：農業生産に従事。

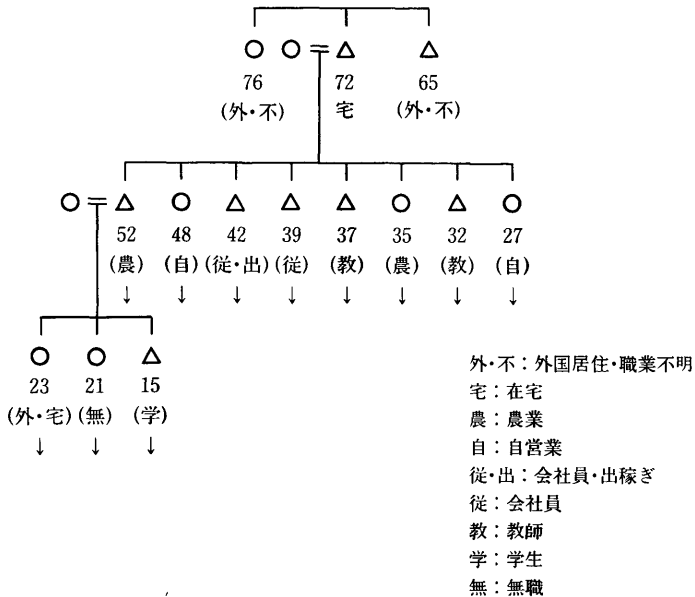


図5 李 (b) 氏家族

7) 五男 (32才)

現住地：永吉県左家鎮。
現状況：漢族中学校の教師。

8) 三女 (27才)

現住地：永吉県土城子満族・朝鮮族郷 (婚出)。
現状況：写真屋を経営。

C. 第三世代

1) 長女 (23才)

現住地：韓国 (婚出)。
現状況：専業主婦。

2) 次女 (21才)

現住地：遼寧省瀋陽市郊外。
現状況：未婚，無職。

3) 長男 (15才)

現住地：遼寧省瀋陽市郊外。
現状況：某朝鮮族中学校に通学。

(6) 金 (b) 氏家族

A. 第一世代

1) 長男 (75才)

現住地：星火村。
現状況：農業生産に従事。

B. 第二世代

1) 長男 (55才)

現住地：星火村。
現状況：鎮センターの農機具修理
工場に勤務。

2) 長女 (51才)

現住地：永吉県孤店子郷朝鮮族村
(婚出)。
現状況：農業生産に従事。

3) 次男 (44才)

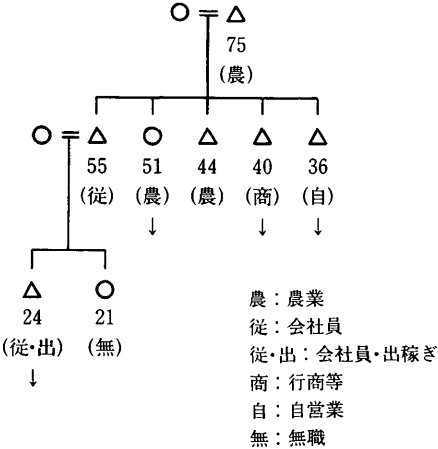


図6 金 (b) 氏家族

現住地：星火村。

現状況：農業生産のかたわら，現地でロバ・タクシーを経営。

4) 三男 (40才)

現住地：吉林省敦化市。

現状況：キムチを製造・販売 (出稼ぎ，行商)。

5) 四男 (36才)

現住地：吉林省延边朝鮮族自治州延吉市。

現状況：自動車修理工場を経営。

C. 第三世代

1) 長男 (24才)

現住地：広東省広州市。

現状況：某韓国系企業で従業員として勤務 (出稼ぎ)。

2) 長女 (21才)

現住地：星火村。

現状況：未婚，無職。

(7) 金 (c) 氏家族

A. 第一世代

1) 長男 (70才時に死亡)

原住地：星火村。

2) 次男 (62才)

現住地：星火村。

現状況：在宅。

B. 第二世代

1) 長男 (35才)

現住地：星火村。

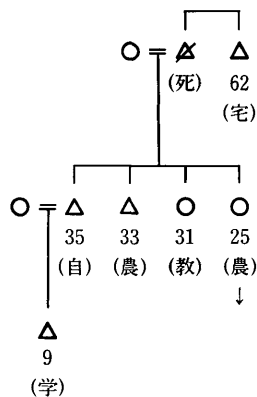
現状況：鎮センターで朝鮮料理屋を経営。

2) 次男 (33才)

現住地：星火村。

現状況：農業生産に従事。

3) 長女 (31才)



死：死亡
宅：在宅
自：自営業
農：農業
教：教師
学：学生

図7 金 (c) 家族

現住地：星火村。

現状況：村内の男性と結婚，星火村朝鮮族小学校の教師。

4) 次女（25才）

現住地：永吉県孤店子郷朝鮮族村（婚出）。

現状況：農業生産に従事。

C. 第三世代

1) 長男（9才）

現住地：星火村。

現状況：鎮センターの漢族小学校（2年）に通学。

以上のデータを整理し分析すると次のようになる。

（1）キョウダイの行方

A. 第一世代

全21人のうち，農村居住者が12人（57.1%）で最も多く，東北三省の省都（吉林，長春，瀋陽）居住者がその次で5人（23.8%），海外（韓国，日本）在住者が4人（19.0%）となっている。ここでは，第一世代の多くがいわゆる移民一世であるために，後述の第二，第三世代に較べて海外居住者が多いのが特徴になっている。

B. 第二世代

全35人のうち，農村居住者が20人（57.1%）で最も多く，残りの15人（42.9%）は全員が都市（吉林，瀋陽，天津，チチハル）居住者（出稼ぎによる一時居住を含む）である。なおここでは，都市居住者つまり農業から工業に転進した者が多い点の特徴になっている。

C. 第三世代

全12人のうち，農村居住者が6人（50%）でやはり最も多く，都市（広州，瀋陽）居住者がその次で5人（41.7%），海外（韓国）居住者が1人（8.3%）となっている。ここでは，若者が中国最南端の大都市（広州）にまで出稼ぎに行っていることや韓国に嫁に行っていること，及び職業のない若者が現れたことなどが特徴になっている。

（2）職業関係

A. 第一世代

農業従事者（兼業者を含む）： 6人（28.6%）

在宅（過去は農業従事者）：	4人（19.0％）
死亡（生前は農業従事者）：	2人（9.5％）
会社員（出稼ぎ・臨時従業者を含む）：	4人（19.0％）
自営業者：	2人（9.5％）
不明：	2人（9.5％）
行商（キムチ販売による出稼ぎ）：	1人（4.8％）
総数：	21人（100％）

B. 第二世代

農業従事者：	16人（45.7％）
死亡（生前は農業従事者）：	1人（2.9％）
自営業者（出稼ぎを含む）：	8人（22.9％）
会社員（出稼ぎ・臨時従業者を含む）：	6人（17.1％）
教師：	3人（8.6％）
行商（キムチ販売による出稼ぎ）：	1人（2.9％）
総数：	35人（100％）

C. 第三世代

学生：	5人（41.7％）
会社員（出稼ぎ・臨時従業者を含む）：	3人（25.0％）
無職：	2人（16.7％）
幼児（学齢以下）：	1人（8.3％）
主婦：	1人（8.3％）
総数：	12人（100％）

第一世代では、生前および退職前の職業を計算に入れると農業従事者が21人中12人（57.1％）で最も多い。それに、調査時現在は自営業者や行商人であっても、それ以前は農業生産に従事していた者が多数を占めている。

第二世代では、農業生産に従事してきた者が35人中17人（48.6％）で、やはり最も高い割合を占めている。ただし、自営業者が22.9％（第一世代では9.5％）に、月給労働者（会社員と教師）が25.7％（第一世代では19.0％）と、それぞれ多いことは注目に値する。これはすなわち、第一世代と第二世代の間に緩やかではあるが社会移動が

あったことを意味する。もっともここでは純粋な世代間移動のほか、世代内移動つまり本人の生涯を通して行われた職業移動があったことを忘れてはならない。

第三世代では、最大の特徴はなんと言っても農業生産に従事している者が1人もいないことである。都市での仕事はまだ見つからないために家に居候している女性もいるが、調査時の彼女たちの話から推察すると、いずれは出稼ぎなどで都会へ出ていくだろうと思われる。また、第三世代には学生が約半数を占めており、将来かれらのなかから、もしかしたら何人かの農業従事者が現れるかもしれない。だが韓国企業が大量進出している今日の状況からして、第三世代から農業従事者がほとんど現れない可能性も十分あるといえる。

3. 出稼ぎブームとある中年男性の突然死

家族三世代の行方を追ってみると、出稼ぎや近年に進出した韓国企業などに雇われて遠く村を離れた者が目立っていることがわかる。その理由として、1983年に「生産責任制」が導入されて以来、農民たちがそれまでの集団農業の束縛から解放され、自由に農村を離れることや、物価の上昇などにより生活が困難になったこと等が挙げられる。

改革後の2、3年の間に、生産性の著しい向上により農民の生活が大きく改善されたことは確かである。だが、限られた耕地面積から一定量以上の収穫を得ることは不可能だった上に、生活物資の価格が上昇したにも拘わらず米価格だけが依然として10年前の水準にとどまっていたため、農民の生活改善はついに頭打ちとなった。米づくりだけではもはや生活を維持していくことが困難となった農民たちは、旅費や商売資金を手にした者から順次都市へ流出した。ある者は行商のために国内の大都市へ足をのばし、ある者は親戚や知人を頼りに国境を越え、韓国や旧ソ連にまで出稼ぎに行くようになった。

東北三省の朝鮮族村で、現在ブームになっている出稼ぎを形態別に分類するとおおよ次のようである¹⁹⁾。

- 1) 国内の各都市におけるキムチ商売。
- 2) 東北三省を中心とする各大都市における朝鮮料理屋の経営。
- 3) 国内の各都市や海外の韓国系企業における雇用労働（「労務」、「劳工」）。
- 4) 親戚訪問を建前に行われる韓国での不法就労。

筆者が1992年7月から断続的に調査を行っている吉林省永吉県星火村では、翌年以

19) 出稼ぎに関してより詳しくは韓 [1994] を参照されたい。

降も村に残って農業を続ける予定だと答えた世帯が、川辺屯では全体の約40%、そして北屯ではわずか全体の約25%に過ぎなかった。なお川辺屯には、親戚訪問を建前に韓国や旧ソ連へ出稼ぎ者を送り出している世帯が12世帯、キムチ商売のために国内の各都市へ出掛けて行った（一部の家族員が出掛け、行き先でキムチを製造・販売する）世帯が6世帯、都市で朝鮮料理屋を経営するために、家族全員もしくは一部が一時的に村を離れている世帯が4世帯あった。つまり川辺屯では、全朝鮮族世帯（65戸）の3割以上が、1993年3月現在出稼ぎのために村を離れていることになる。そのほかにも、外国の貨物船や漁船で働くために、出国手続をしている若者（男性）が5人ほどおり、付近の朝鮮族村では、スペインやシンガポール、サイパンなどの国・地域へ出稼ぎに行く者もいた。

出稼ぎを男女別にみた場合、男性が一般的に力仕事をしているのに対し、女性の大部分は飲食業界で働いているのが特徴になっている。男性が有能で若い場合は比較的に仕事を見つけやすいのだが、そうでない場合には妻が出稼ぎに行く場合も多い。したがって、女性だけが出稼ぎに行っている家庭では男性の心配は多い。それは後述の例にもみられるように、女性の性を目当てにした商売が近年に韓国企業の進出とともに急激に増えたからである。

以上の状況に基づいて本節では、出稼ぎブームの最中で命まで落としてしまった1人の中年男性にまつわる実話を紹介する。

第二次調査（1993年1月）の初日に、筆者は北屯の「情報室」（現地入りして必ず最初に訪れる家）で、ある思い掛けぬ事件を耳にした。前回の調査（1992年夏）で何度も一緒に酒を飲みながら仲よくしていた北屯の1人の中年男が2、3週間前にアルコール中毒で突然亡くなったとのことであった。彼は村の電気修理工で、筆者が調査地で最も仲よくしている東君（仮名）の姉の夫でもあった。

夕方、わたしはあれほど元気だった男が急死した本当の原因が知りたくて、とあるハルモニの家を尋ねた。

——アンニョンハセヨ？（お元気でしたか？）

「アイゴ、ワックナ！」（あら！いつ来たの。）

——昨日です。晩ご飯の支度ですか。

というような挨拶を交わしながら、わたしは開いている部屋のドアからなかへ入り、オンドルの縁にひと先ず腰を掛けた。

ハルモニの苗字は「鄭」で、彼女に最初に出会ったのは約10年前、つまりわたしが

高校時代に北屯へ遊びに行ったときのことである。そして1992年の夏、第一次調査時に再会し、村のハルモニたちの生活について少し話を聞かせてもらったことがある。

「外国からそんなに行ったり来たりして、お金は大丈夫なの？　今回はまた何の調査で来たんですか？」

——別に……今回はただ遊びに来ました。たとえば、前回のよう村びとと一緒におしゃべりをしたり……ところで、東君はどこかへ出掛けたんですか。

東君というのは鄭婆さんの末っ子のことで、年齢はわたしと同じく当時27才の独身であった。彼と知り合ったのも約10年前のことで、前回の調査ではよく一緒に酒を飲みながらさらに親交を深めていた。彼は酒のほかに喧嘩にも強く、一緒にいると人になめられたりすることはなかった。そして今回も当然彼に会えると思い、土産として日本製のライターまでもって行ったのである。

「それが、東ちゃんは姉さんと一緒に瀋陽（旧奉天）へ出稼ぎに行ってしまったの。長男も去年行ってしまったし、次男は知っている通り分家（同屯）に出しちゃったでしょう」

——ということは、現在家にいるのはハルモニだけですか。

「そう。今はこの家のなかで寝起きしているのはこの婆さん1人だけ。次男の嫁が明日か明後日、食堂の従業員として吉林へ出稼ぎに行くから、次男と孫娘の食事をわたしが作ることになるけどね」

——ここ半年の間に、いろいろあったそうですね。

しばらく沈黙したあと、わたしは本題に入る言葉を探った。

「あ、もうあっち（情報室）で聴いたのね」

——ええ、先程あっちで聴いて本当にびっくりしました。一体どういうことがあったんですか。

「アイゴ、うちの婿は、本当に、女房（鄭婆さんのひとり娘）にも会えずに突然亡くなってしまったの」

——ほかの誰よりも、東君のお姉さんと子どもたちが可哀相過ぎますね。

「うちの娘が如何に悲しんだことか……去年、娘夫婦が田圃を2、3ムー植えたけど、それだけじゃ子どもたちの学費にもならないから、今年からはどうしても1人を外地へ出稼ぎに行かせなければならなかったんです。実は2年前にも、1ヶ月半ほど、娘が吉林市のある料理屋で仕事をしたことがあるんです。そのときも、婿は幼い2人の子どもと一緒に家に残っていたんです。もちろん、わたしのほうも子どもの面倒をみてやったり、いろいろと手伝ったのですが、やはり男1人の生活は辛かったのか、

結局、婿はすぐ女房を家に呼び戻しました。その当時に婿が女房に言った言葉が、『人間が生きてどれぐらい一緒にいられるだろう。もう何処へも行くな』でした。……ところが、家計がますます苦しくなって、再び女房をどこかへ行かせざるを得なくなりました。娘が瀋陽で仕事口を見付けたら、婿も家を5〜6,000円で売り払ってあとからついていくことになっていました。

でも、いざ女房が離れて行く瞬間になると、婿は辛くて何もしゃべれませんでした。娘の話によると、自分が出嫁ぎに行く1ヶ月前から旦那は辛くて落ち込んでいたそうです。婿は内気で性格も几帳面な人です。ほかの人のようにマージャンもやらなければ、花札もやらない人間でした。本職の電気工の仕事のほかに、それこそ暇さえあれば庭の手入れをしたり、道具を修理したりして、一時もむだに過ごさない人でした。ただお酒だけは大好きでしたけどね。

うちの娘について言えば、旦那には至れり尽くせりで、不断も旦那が家にいるときは近所に遊びにも行きませんでした。一旦怒ったら誰よりも怖いという旦那の性格を娘はよく知っていましたからね。

それが、女房が出嫁ぎに行くことが決った頃には、旦那の態度もそれまでとはぜんぜん違い、女房が何処へ遊びに行こうと、一切責なくなりました。それについて、わたしも不思議に思ったほどでした。離れ離れになる直前ぐらい、女房を自由にさせたかったんでしょうね、きっと。

娘が離れて行く前の日、その日の夜中にでしたが、婿は寝ている女房をむりやり起こしたそうです。『わたしたちが、金を溜めてまたいつ一緒に暮らせるだろうか』と言いながら、離別酒でも飲もうということだったのです。だいぶ前から押し入れのなかに隠してあった上等のお酒と菓子類を全部取り出して、『今度別れると一年ぐらいは会えないだろうから、おれが注ぐ酒でも飲んでくれ』と言いながら頻繁に食べ物を娘の口に運んだそうです。その日の夜は、結局そうやって2人で飲み明かしました。

翌日の朝ですが、わたしが娘たちに、『朝ご飯は簡単に済まして昼ご飯はわたしが準備するから、それを食べて午後2時の汽車にちょうど間に合うでしょう』と言ったのを今も憶えています。そして、昼はみんな家に集まって食事をしました。婿はご飯はちっとも食べないでお酒ばかり飲んでいました。実は、当日の朝もお酒しか飲まなかったそうです。

しばらくして、うちの娘と一緒に瀋陽へ行くことになっていた近所の友達（婆さんの娘の女友達）も荷物をもって家に来ました。末っ子の東ちゃんも一緒に行くことになっていましたので、3人の荷物を合わせると、押し車一杯になってしまいました。

わたしも駅までは同行したのですが、婿はそこでも辛い気持ちを押さえ切れず、離れて行く女房に対して一言もしゃべれませんでした。泣いている娘の手を取って、わたしも目が潤んできたのですが、婿がみている前でしたので、ぐっとこらえました。

わたしは娘を見送ってから最後に家へ帰って来ました。帰ってみると、婿がぼうっと庭に突っ立っているじゃありませんか。『これからは子どもたちとだけの生活ですから、一層気を引き締めてやらなければなりませんよ』とわたしは念を押すと同時に、『学校がはじまったら、子どもたちはわたしが家に泊めながら飯を食わせて学校まで送るから心配しないでください』と言いました。婿はその頃に、村の養魚池を引き受けることになっていました。

結局婿は、その日の夜も家に来て食事をしたわけですが、またお酒ばかり飲んでいました。お酒を飲みながら、子どもたちの靴を買う心配、味噌や唐辛子醬をつくる心配などばかりしていました。それでわたしが、『子ども2人を合わせてもたかだか3人だから、そんな心配は一切しなくてもいいですよ』と言いました。

翌日、わたしは心配で朝早く婿の家を覗きに行きました。そうしたら、養魚池にも行かないで、家でまたお酒を飲んでいたではありませんか。立場からして、怒るにも怒れないし、結局その日はそのまま一日ほうっておきました。

その日の夜、わたしはクムチャリ（夢場所、夢のなかの世界）が騒がしくてよく眠れませんでした。夢のなかで、人が死んだ後の泣き声に何度もうなされました。それで、朝起きてから真っ先に隣の家へ行きました。隣家は花札をやるために村の婆さんたちが毎日集まってくる場所ですが、前の夜の夢の話を皆にしたところ、『夢のなかで他人の泣き声を聴くと、自分もそのうち泣く羽目になる』と言うではありませんか。とても嫌な気持ちでした。いつもなら、わたしも花札をやるのでしたが、その日ばかりはただぼんやりと座っていました。

午後の3時頃だったと思いますが、再び婿の家に足を運びました。お酒を飲み過ぎたのか、婿はオンドルの上で横になっていました。わたしは、『まだ起きてないのですか』と呟きながら台所に回って焚き口に火を入れ始めました。しかし、焚き口の扇風機が壊れていて、なかなか火も入らず煙が外に出て困ってしまいました。しばらくして、『扇風機が壊れているんだけど大丈夫ですか』という婿の声が部屋のなかから聞こえてきました。『でも、なんとかオンドルを暖めないといけませんから』とわたしは答えました。しばらくして、婿が水が飲みたいと言うので、すぐにお湯を沸かして茶碗一杯に注いでもって入ったのですが、足りなくともう一杯お代わりをあげました。それを約半分ぐらい飲んでから、今度は冷たい水が欲しいと言い出しました。

水を飲んでから吐き始めたのですが、吐き出したものには赤い血が混ざっていました。『血が混ざっているというのは、胃がアルコールにやられている証拠だから、これ以上お酒を飲んではいけませんよ』とわたしは注意しました。そうすると婿は、『これは血じゃなくて、落花生の皮だ』と言いました。

台所には何も食べるものがなかったので、わたしは家に戻ってご飯とおかずをもってきました。それでも婿は何も食べようとしませんでした。もうこれで3日間も空腹の状態でお酒を飲んだことになるわけです。あの人は、もともとお酒の後は食事を一切しない人なんです。

しばらくして、息子（11才の男の子。13才になる娘は、当時学校の寮に住んでいた）が学校から帰って来ました。ご飯を食べさせた後、『外へ遊びに行かないでお父さんの面倒をみてあげなさい。それから、何かあったらすぐお婆ちゃんを呼びに来なさい』とわたしは子どもに教えてからほかの用事もあったので家へ帰って来ました。

家に戻って、夜中の12時を過ぎてもわたしは眠れませんでした。よっぽど婿のところで寝ようと思ったけど、婿の方が気を遣うだろうから、結局はやめました。後から聞いた話ですが、子どもが一晩中飲み水を運んだそうです。だけど、夜中の12時を過ぎますと子どもも眠くなるでしょう。それで子どもはいつの間にか眠ってしまったらしいです。

寝ている間に、子どもの耳にウーウーという唸り声が聞こえたらしく、慌てて起きてお父さんのおなかを触てみたら、異常に冷たかったそうです。子どもでも日頃聞いた話がありますから、爪の根元のところを突っ突いてみたり、指先で目の当たりを刺激してみたらいいのですが、何の反応もなかったので大慌てでわたしのところへ走って来ました。そのときが多分夜中の2時半頃だったと思いますが、わたしは慌てて起きて、まずお医者さんの家へ駆け付けました。それから真っすぐ次男の家へ行って寝ている次男を起こして大至急押し車を用意させました。お金もなかったので、その足で親戚の家まで行って、窓をノックして急遽お金を100元借りました。その後、婿はすぐ2 km 離れた鎮立病院に運ばれました。

宿直のお医者さんは、そのときは何の心配もないと言いました。ただアル中で昏睡状態にあるとのことでした。確かに、婿はこれまでに一度も病気になったことはありませんでした。なにしろ、生まれてから今までに注射一本も打たれたことのない人間ですから。それで、お医者さんはさっそく酸素マスクとブドウ糖の注射の用意に取り掛かったのですが、ものの30分も経たないうちに、婿は完全に生き還ったのです。自分の手で注射器とゴム管を強引に取り外す婿を誰も取り押さえることができませんで

した。わたしが、『ここが何処なのか知っていますか』と聞くと、『おれの家に決まっとるじゃないか』と言いました。少しぼけた話はしていたものの、みんな命には別状ないと思っていました。お医者さんからも、もう大丈夫ですと言われ、酸素マスクも取り外されました。

それでも、婿の体がだいぶ弱っていましたので、わたしはブドウ糖を続けて注射するようにと医者に頼み、再び婿の顔を覗き込みました。……そのとき、婿の顔色は既に変わりつつありました。……多分、3時半頃だったと思いますが、婿はみんなの呼び声に二度と反応しなくなりました。

実は、わたしの夫も約6年前に同じ病院の同じ部屋で、しかも全く同じベットで亡くなったわけですが、今回ほどは悲しみませんでした。うちの娘から、何が何でも自分の代わりに旦那の面倒をみてくれと再三頼まれたのです。お酒を飲んだ日には、一緒に寝てあげながらも、面倒をみてあげてほしいと頼まれたのです。それが、娘が出発した3日目にして、婿を死なせてしまったのです。……

夜が明けてから、人に頼んで、すぐ瀋陽に電話を掛けさせました。電話を掛けるといっても、ごらんのような田舎ですから、長距離電話は市内（約35km離れている吉林市のこと）まで行かなければなりません。結局、電話が通じたのは夜中でしたけれども、電話に出たのは、まだ仕事が見つからないまま親戚の家に寄宿していた東ちゃんでした。突然の死亡知らせに、息子は一瞬何もしゃべれませんでした。その当時、一緒に行った3人のうち、娘だけがすでに仕事を見つけて家にいなかったそうです。

後に娘から聴いた話ですが、約300人ぐらいの人が並んでいる“労務市場”（仕事の欲しい人たちが毎日集まる場所）に3時間ほど立っていたら、ある“老板”（レストランのオーナー）に気に入られ、そのまま“売られて”行ったそうです。

婿が入院したという知らせが娘の耳に入ったのは翌日の早朝でした。娘が受けるショックを考えて、死亡したとは直接言わず、ただ重病で入院したと伝えました。その日の夕方、3人（行くときと同じメンバー）とも吉林行きの夜行列車に身を乗せてしまいました」

——そうしますと、東君はその後再び瀋陽へ行ったわけですね。

と、わたしは東君が家にいないのを知って聞いた。

「そうなんです」

——そのとき一緒に行った友達も再び瀋陽へ行ったのですか。

「いいえ、彼女はもう二度と行かないそうです」

仕事が容易に見つからないことが、前回の体験でわかったからか、あるいは自分の

身にも同じような悲劇が起こらないとも限らないので、彼女はしばらく家を離れないことにしたのだろう、とわたしは思った。わたしがちょうど「労務市場」に関してもう少し尋ねようとしたところで、鄭婆さんは自然に話題をそちらへもっていくのであった。

「娘から聴いた話ですが、“労務市場”はまるで樺皮廠にある豚市場のように汚いところで、そこら辺に1ヶ月も寝泊りしながら、買い主が現れるのを待っている者も多いとのことでした。我先に買われようと、顔をお化けのように真っ白に化粧した女もいれば、持ち金を使い果たし、右へも左へも行けなくなって、ただそこに立って泣いている人もいるとのことでした。

娘は運がよくて、たったの3時間で雇い主を見つけることができましたが、それでも、待っている間の自分の姿は死ぬほど惨めだったそうです。とにかくあそこは、人が我が身を売る場所にほかならないわけです。はじめは、天津から来たというある買い主がそっと寄ってきて、『4人の若い女性を募集しているが行かないか』と聞いたそうです。どうも様子が普通じゃなかったので、東ちゃんが前に出て断ったそうです。もしあの時点で天津に行ってしまったら、それこそ大変なことになったに違いありません。天津へ行くと、月に400元もくれると言っていたそうですから、きっとろくなことはさせないと思います。結局娘は、その後に現れたもう1人の老板について行ったわけです。

娘が連れられて行ったのは、瀋陽ではごく普通のレストランでしかたけれども、幸い店の老板はとても優しい人だったそうです。それで、うちの娘は自分が非常にラッキーだと思っていました。何日道路に立っていても、雇い主が見つからない人が多いですからね。……そう思っている最中に、この事件が起こったわけです」

——結局、東君のお姉さんはその店でほとんど働く暇もなしに、主人が入院したという知らせを受けたわけですね。

「そうです。しかし、娘はまさか旦那が死んだとは思っていなかったのです。婿が亡くなった翌日に娘は家に帰って来ましたが、汽車から降り立って、娘は直接病院へ行こうとしました。しかし、自分を眺めている村びとたちの様子から、娘はたちまち事態の重大さに気づきました。それに続いて、道ばたに立っていた漢族の人たちに、あんたの旦那はもう死んだのよと告げられ、娘はその場で座り込んでしまいました。

……

娘が連日家で薬を飲んでいいる間に、東ちゃんは再び瀋陽へ仕事捜しに行ってしまうました。数ヶ月前の話ですが、瀋陽市近郊のある朝鮮人村で製鉄工場を新設するとか

言って、向こうから人集めにここまでやって来たことがあります。それで、うちの東ちゃんと何人かの友達早速ついて行ったのです。実は、人を集めに来た人たちは、みんなわたしの遙かむかしの同級生だったもんですから、子どもを他所へやるよりはずっと安心でした。とは言っても、仕事はかなりきつかったと思います。遊んでばかりいた東ちゃんのことですから、結局、途中でやめて帰って来ました。

東ちゃんがこの間、娘と一緒に瀋陽へ行ったのは2回目で、今回は3回目になるわけです。何かほかの仕事を探しに行ったのですが、まず姉が旦那の急死で半日しか働けなかった店に行って、姉をもう一度使ってくれないかと頼みに行きました。次の日に東ちゃんから電報が届きまして、いつでも構わないから、とにかく来てくれとのことでした。そんなことで、娘は一昨日再び瀋陽へ行ったわけです」

——そのうち、東君のお姉さんは子どもたちを連れて、向こうで暮らすことになるのでしょうか。

「どうなるんでしょうね。……娘が行く前に、家財道具を全部わたしのところへ運んできました。娘の家は、現在売りに出していますが、人があのように死んでしまった家ですから、なかなか買い手が見つかりません。

娘たちの借金もばかになりません。おそらく3,000元は下らないでしょう。家を売って借金を返すしかないと思います。……子どもたちも、学校へ行くのにお金がかかるし、また2人とも勉強がよくできるほうですから、最後まで勉強させたいです。外地で下宿している孫娘は、お父さんがあんなふうになくなったので、自分が学校へ行かずに側で世話してたら、決してお父さんを死なせることはなかったはずと言って、悔しくて学校でも毎日泣いているそうです。

娘のほうは、毎晩夫の姿が夢のなかに出てくるそうです。本人の話では、夫の霊にとりつかれているに違いないと言っています。一昨日は、どうしてもそれに耐えられなくて、友達と一緒に鎮の占いさんのところへ行ってきました。はじめは、『将来貴女は大金持ちになる』とか、『子どももみんな出世するが、名前を変えたほうが良い』とか、そのような話しかしてくれなかったのですが、夫のことについて聞いてみたところ、『貴女の夫はもともと、35才までしか生きられない運命ですが、その年になった頃に何事もなかったですか』と占いさんに聞かれたそうです」

——お婿さんは、今年おいくつだったんですか。

「今年、39になります。……婿は娘が出掛ける前に言っていたそうです。つまり、今年自分は39才になり、39の9はとても縁起の悪い数字だと。それから『何だか知らないが、今年は何か不吉なことが起こりそうだ』と、娘に言ったそうです。それで娘は

『大の男がそんなことを言っではだめでしょう』と、軽く言葉を返したそうです。

婿が亡くなってから、娘は例の占いさんに、しつこく夫のことについて聞いてみたところ、『貴女の夫は今年の冬至の日から数えて6日目に亡くなる』と言ったそうです」

——その占いさんは、お婿さんがすでに亡くなられたことを知っていたのではありませんか。

「いいえ、最初占いさんはそのことを知らなかったはずです。言われてから、『実は夫は数日前にすでに死にました』と娘が言ったら、『今回はたまたま側に人がいなくて死んだのであって、そうじゃなかったらもう少し生きられたはずだ』と言われたそうです。それから、『夫の靈魂はまだ生きているので、祭祀は必ず冬至の日から数えて6日目の日にしなさい』とのことでした。最後には、『貴女の夫の命はそもそも35才までであったから、4年も余分に生きたことになるのだ』と慰めてくれたようです」

——お婿さんの性格は、ちょっと普通の人と違ってたんじゃありませんか。

「そうです。あの人の性格は、村の誰もが知っているくらい怒りっぽいです。一度怒ったら、ナイフでも何でも投げ付ける性格です。つまり、一旦怒ったら後のことは考えないのです。だいぶ前の話ですが、婿は娘に対して、『今日は子どもの誕生日だから、仕事に出掛けなくてくれ』と言ったそうです。仕事というのは、つまり脱穀のことですが、早くやっしまわれないといけなかったので、夫がお酒を飲んで寝ている間に娘は脱穀場に出掛けたのです。婿は夜中に起きて女房がいらないのをみてすぐ怒ってしまいました。

まだ雪がしんと降っていた時期でしたから、外はかなり寒かったはずです。婿は肌着姿でかなり遠くにある農場まで走って行って、女房をむりやり家まで引っ張って来ました。その日、うちの娘は死ぬほど殴られました。婿はそういう人間なんです。

娘も夫の性格をよく心得てはいたんですが、今年はどこを突っ突いてもお金の出来そうなところがなかったの、旦那をほっといても出稼ぎに行かざるを得なかったのです。しかし旦那としては、よっぽどのことがない限り妻を外へ行かせたくはなかったと思います。あの人は男としてのプライドも高かったのですから。結局、男として家族さえ養えない自分が許せなかったのでしょう……」

わたしは聞き取りを終えてから、あれほど元気だった男がいとも簡単に死んでしまった陰の原因をようやく分かってきたような気がした。つまり今度の死亡事件は、現

在流行っている朝鮮族村の出稼ぎブームの真ただ中に起きた悲劇であり、急激な社会変化について行けず、絶望してしまった1人の中年男の身に起きた災難であった。

これまで、夫婦は基本的にワンセットになって常に一緒に暮らしていた。そして家事労働は基本的に女の手でなされてきた。それが今日では、家庭を経済危機から救うために、数ヶ月ないし数年間を夫婦が離れ離れになって暮らすことも珍しくなくなった。そして今では、主として女性が担ってきた育児や炊事、洗濯等の家事労働を、家に残った男が一手に引き受けてやっている光景が目につくようになっただけでなく、女性の出稼ぎ先での売春等によってもさまざまな家庭問題が増えはじめた。筆者がこれまでに行った幾つかの出稼ぎ者インタビューがそれらを物語っており、詳しくは拙稿 [韓 1994: 73-101] を参照されたい。

今回の事件は古風な朝鮮族男性の身に起こった惨事であり、今後も類似事件が再発する可能性はあると密かに思いながら、わたしはしばし調査地を後にした。

4. 困難時の生活保障

働く能力のある者は、いざとなれば出稼ぎなどで家庭経済の危機を救うことができる。ところが、家に病弱者しかいない場合はどうなるのだろうかと思ひ、わたしは「生産責任制」が導入されて以来、それまでにあった政府による社会保障制度について調べたくなった。

出会う村びとたちにそれとなく尋ねてみたところ、生活保障が以前よりずっと手薄になったというのが大方の反応であった。星火村長や数人の村びとに、「現在農村ではどのような補助金制度がありますか」と尋ねたところ、最初の答えはいずれも「何もない」の一言であった。だが、何度もしつこく追求していくうちに、農村に社会保障がまったくないわけではないことがわかった。

たとえば、1990年頃から水不足で北屯の農民が農業生産を継続することができなくなったときに、県及び鎮政府は急遽12万円の救済金と若干の玉蜀黍を星火村民に支給した。そのほかにも、「困難戸」（貧困と認められた家庭）に対しては、地元の郷政府が農業税の減免対策を講じ、「特困難戸」（極貧家庭、たとえば精神病患者を抱えている上に労働力もない家庭）に対しては、村政府が村民を組織して家を建ててあげたりすることもあった。

筆者が4度目の調査（1994年1月）で同村を訪れたときに村びとから聴いた話によると、春節前に鎮政府は8戸の「特困難戸」と認定された家庭に対してそれぞれ50～100円の補助金を与えたという。これはただの象徴的な金額に過ぎないが、それ

でもなお、昔ながらの貧しい家庭を扶助する「扶貧制度」が今も存在していることを物語っている。このように家族や本人の力だけではどうしても生活していけない場合は、政府から若干の生活補助金が支給されているが、援助を受けている当事者たちの言葉では、「餓死しない程度」の援助はしてくれるとのことであった。

樺皮廠鎮には「敬老院」（鎮立老人ホーム）があり、55才以上の無子女、無労働力の者は誰でも入居することができる。そこには食事や住まいのほか、施設付属の畑や養魚池もある。だが、老人ホームに入るのは通常漢族の老人であり、朝鮮族の者で施設に入っている話はまだ一度も聞いたとこない。言葉の問題もさることながら、近親者が1人でも近くにいる限り、年寄りを老人ホームに入れることによって、村びとから非難されるようなことは誰もしないという。

星火村ではまた、戦争（抗日戦争・国共戦争・朝鮮戦争）に参加したことのある、いわゆる「革命軍人」と称される国家幹部に対して、毎月数十元の革命軍人補助金が今なお支給されている。さらに戦争負傷者に対しては、等級別に負傷手当が支給されている。たとえば、片方の足指を3本無くした「二等乙級」負傷者の場合は、年間800元あまりの現金のほか冬用の皮靴一足が支給される。そのほか「革命烈属」（戦争死傷者家族）には、正月などに鎮政府と村政府より食糧品や年賀ポスターが贈られるという。

県政府は、各戦争負傷者に対して「中華人民共和国・革命傷残軍人証」と称する戦争負傷者証明書を発行し、そのほかの身体障害者に対しては「残疾人証」を発行している。これらの人は、県内での映画鑑賞や汽車およびバス（個人経営のバスも含む）に乗るときは通常料金の半額だけ支払えばよいとされている。そのほか、個人経営を行う際には所得税を含むすべての税金が免除される。

中国では、今なお志願兵制度を実施しているが、星火村辺りではここ数年ほとんど募兵が行われていないとのことであった。また、たとえ募兵が行われたとしても、今は数年前と違って志願者はほとんどいないだろうと村びとは語っている。その理由は、今は3年間服役しても、昔のように農村戸籍が都市戸籍に変わるわけではないし、また除隊してから都市部で仕事が見つかるわけでもないからである。もっとも、15年間にわたって長期に服役したいいわゆる古参兵に対しては「国家幹部」として扱い、復員後には従来通り都市の戸籍を与えると同時に、職も手配してくれるとのことであった。

村長や村びとたちの「何の社会保障もない」という言葉には、現行の社会保障制度に対する農民たちの不満の気持ちが込められていた。年々増加する農業税についてはもちろんのこと、毎年国に真っ白な米ばかり納めているにも拘わらず、農民が困難な

ときには玉蜀黍しかくれないと、朝鮮族農民はかなりの不満をもっていたことについては前にも触れた。

星火村では、農民に課せられている税金の類には次のようなものが含まれている。

- 1) 鎮教育費：全樺皮廠鎮の教育費の補助に当てられる。
- 2) 放送代：「広播」(有線ラジオ)の放送代。
- 3) 軍人補助金：軍人(すでに死亡した者を含む)やその家族に対する補助金。
- 4) 養老基金：樺皮廠鎮立「敬老院」(1軒)に対する補助金。
- 5) 民兵訓練費：民兵とは「農民兵士」の略で、正規部隊の予備軍的な存在である。
- 6) 集団累積金：工場建設など集団事業に備えた掛け金。
- 7) 防雹基金：雹による災害に備えた保険金。
- 8) 予防接種代金：ここでは、主に家畜の予防接種を指している。
- 9) 青年・婦女活動費：主に「五・四」青年節や「三・八」婦女節に使われる。
- 10) 「場院」火災保険：食糧倉庫など公共施設の火災に備える保険金。
- 11) 水利税：ダムなど水利工事に当てられる税金。
- 12) 映画代：農村の各村を巡回しながら定期的に上演される映画の観賞代金。
- 13) 耕地養護基金：主に土質の改良に使われる。
- 14) 道路整備基金：道路の建設および補修に当てられる。
- 15) 村幹部の賃金：村幹部は通常村長、共産党支部書記、会計、出納、治安管理員、婦女主任などより構成される。
- 16) 村政府基金：村役場の建設・補修や事務用品の購入などに使われる。
- 17) 村教育費：もっぱら村立小学校の諸経費(教職員の給料を含む)に当てられる。

以上の税金のうち、村政府に納める税金(15)～17))以外はすべて「樺皮廠鎮經營管理所」に納めることになっている。農民にはまた、これらの税金のほかにも鎮民税や農業税(約30元/1ムー=1,000 m²)及び国債購入の義務などの負担が課せられており、これらの出費を合わせると、4人家族の場合、毎年の支出が約200元となる。

そのほか、星火村では身体障害者たちもまた、社会保障制度に対してかなりの不満をもっていた。星火村には、小児麻痺にかかった身体障害者だけで7人いる。小児麻痺にかかった原因は、旧ソ連から輸入した注射液(1960年代初期)にあると言われており、この7人も、全員が幼い頃に注射液を取り間違えられて足など身体の一部が麻痺したとのことである。ちなみに政府は、これまでに被害者に対して何ら補償もしてくれなかった。

II. 農閑期の生活風景

「生産責任制」以降、農業生産性が著しく向上し農民の労働事時間は大幅に短縮した。農民たちの話によれば、農地が狭いほかに近年は除草剤や科学肥料の使用により、1年のうち純粹に農業生産に当てる時間はわずか3ヶ月に過ぎないという。つまり今は、仕事がなくとも毎日「出勤」しなければならなかった集団農業の時代と違い、好きな時間帯に好きな分だけ仕事をすればよいのだ。しかしそうなれば、農民とくに出稼ぎに行っていない人たちは、農作業に当てる時間よりも遙かに長い農閑期をどのように過ごすかが問題になってくる。かれらが如何に来る日も来る日も続く暇を消化しているかを調べるために、わたしはまず2つの農家を対象に1日の生活を具体的に観察することにした。

1日の生活には多種多様な側面が含まれており、それらを観察し記述する方法もまたさまざまである。本章第1節では、まず調査者が川辺屯の金氏家（5人家族）と北屯の崔氏家（4人家族）にそれぞれ寄宿しながら記録した、ある1日の生活に関する観察ノートを紹介する。それ以降の節では、こうした日常生活のなかにもみられる老人たちの姿や、近年では娯楽の王様とまで言われているマージャンについて記述する。

1. 農家の1日

a. 川辺屯の金氏家族の場合

1992年7月30日

午前5:00

奥さんが起床。続いて主人（家長）が起床。奥さんは台所に回り、主人は庭に出る。

午前6:05

家長の母（80才）であるハルモニが起床。続いて家長の息子（休暇中の大学生）と娘（休暇中の高校生）、そして筆者のわたしが起床。

午前7:10

全員が厨房の窓際寄りの一角に集まり、丸い食卓を囲んで椅子に座る。姑と嫁との関係が緊張した雰囲気の中での朝食。食事の内容は、ご飯（パブ）に炒め料理3品、コチュジャンと呼ばれる唐辛子醬を真っ赤に塗り込んだ野菜サラダなど。

朝鮮語におけるパブという言葉は、日本同様主食の飯を指すだけでなく食事一般を意味する。また、ご飯を炊くときに大豆、小豆、緑豆、粟、玉蜀黍、大麦、粟（なつ

め)、栗、馬鈴薯などを一定の割合で米と混ぜて炊くこともよくある。朝鮮族の習慣では、ご飯と汁は匙で掬って食べ、それ以外の副食類たとえばキムチ類や浅漬けの野菜・山菜、ナムル類、煮もの、焼きもの、膾類、干物類などは箸でとって食べるのが正しい食事法とされている。ナムルとは、ほうれん草、芹、もやし類、わらび、ぜんまい、茸類などを茹でてから、胡麻、醤油、葱、にんにくなどを刻んだものを和えてできあがったものである。なお膾とは、新鮮な牛肉や魚を生のままにして酢唐辛子醬をつけたものを指す。

ご飯と汁類を食べるときには、食器を手でもたず食卓に置いたままにし、日本人や漢族のように器に口を付けて汁をすすらないのが礼儀とされている。それから、かつては年寄りを尊敬する意味で老父母を子孫と分けて別の部屋で食事をさせた家庭も多かったが、最近は家族全員が同じ部屋の同じ食卓で食事をするのがほとんどである。その理由の1つとして、近年では老父が亡くなって老母だけが残っている家庭が圧倒的に多く、老母だけを単独の食卓で食べさせるのは却って年寄りを寂しくさせてしまうからだとい村びとはいう。

午前8:20

賭けマージャンをやるために、近所から3人の中年男性が当家に集合。食卓はたちまちマージャン卓に変身する。奥さんは横で主人の「参謀」を勤め、わたしと大学生もその隣で観戦。

午前9:00

マージャン観戦者が四方から続々と到来。ハルモニは、ため息を付きながら外出する。

正午12:20

昼食。料理はいつも奥さんが担当。3人のマージャン仲間のうちの1人も残って当家族と一緒に食事をする。

昼食は、朝の残りものに野菜類を足して簡単に済ませるのが普通だが、客がみえたときには肉や魚料理を新たに作る。約10年前に較べると、現在ほどの家庭でも食生活が随分豊かになったという印象を受ける。

午後1:05

大学生とわたしを除いた全員が昼寝をする。高校生の娘は、朝方に外出したきり帰って来ない。

午後2:30

午前中と同じメンバーによる賭けマージャンが再開される。食卓（マージャン卓）

を囲み、午前中と同じ時間が流れる。ハルモニは庭先の木陰に座ってぼんやりと遠方を眺めている。わたしと大学生は、昼食の後ずっと木陰で雑談をする。ハルモニは話相手が欲しくなったのか、わたしに何度も話しかけてくる。

午後3:55

奥さんは自転車に乗って、約2km離れた樺皮廠鎮センターの食品市場へ夕食のための卵や肉類を買いに出掛ける。

鎮センターには、鎮立百貨店や食品店のほかに、さまざまな個人経営の商店や市場がある。市場は衣類だけを売っているところもあれば、野菜や肉類を専門に扱う生鮮食品市場もある。これらの市場は毎日大勢の人で賑わっており、特に日曜日になると、四方の遠方村からも人が集まり、市場は一層の賑わいぶりをみせる。

主に田圃を営む朝鮮族の場合、割り当てられた畑の面積が比較的に少ないため、一部の野菜を鎮センターの市場で買って食べる家庭も少なくない。また、食用犬は食品市場から少し離れた「馬市」付近で日曜ごとに売られている。

馬市は川辺屯と北屯の間に位置し、周囲20km半径以内に住む漢族農民が、日曜ごとに定期的に集まって馬やラバ、ロバ、牛、豚などを売買する牲畜市場である。売値は、成牛1頭が1,500～2,000元（3～4万円）といったところで、馬は牛に比べて若干安い値段で売られていた。それから、重さ20kg前後の小豚1頭が100元で、食用犬とほぼ変わらない値段で売られていた。

筆者が馬市を見学して驚いたことは、そこで売られている牛はもはや役牛としてではなく、すべて食用牛として売られていたことであった。数年前に同市場を訪れたとき、牛は農業生産における大切な役牛として売買されていた。それが現在では、役牛が完全にトラクターによって代替されてしまったのである。トラクターは「鉄牛」という別名をもっており、かつては値段が高かったために、一般農民にはとても手を出せなかったものであった。しかし現在は、4,000元前後の値段でそれが買えるというのだから、2、3頭の牛や馬を買うより、トラクターを1台買ったほうが採算に合う。

夕方6:00

各マージャン・メンバーの家族員（奥さんや子ども）が相次いで夕食の催促にやってくる。

夕方7:15

マージャンの勝敗を話題にしながらの夕食。野菜、魚、肉類のほかに、伝統的な酒である「濁酒」（タッチュ）が出された。

濁酒の色が黄色いことから、漢族はそれを「黄酒」（ファンチュ）と呼んでいる。

当地域における濁酒は玉蜀黍を原料にしたものが多く、大抵の家庭では、主婦がタンジと呼ばれる壺を用いて家で醸している。なお夏によく飲む一般的な飲み物として、「甘酒」（カムチュ）というものがある。これはご飯を発酵させてつくる飯粒入りの甘い飲み物で、アルコール分はほとんどない。

夜 8:20

ハルモニは、ただぼんやりとオンドルの上に座って天井を眺める。奥さんは寝転んで『アリラン』（「阿里郎」）という朝鮮語の雑誌を読む。わたしを含めた残りの全員は、14インチの白黒テレビの前に座ってスポーツ番組を觀賞する。

夜 9:30

奥さんと娘が全員の布団を敷き、それぞれの人は足を洗って寝る準備に入る。

b. 北屯の崔氏家族の場合

1994年 2月14日

午前 5:25

紙張りの天井裏を駆け回る鼠たちの不気味な足音や、爆発する赤ん坊の泣き声にわたしはすっかり目を覚ましてしまった。

若奥さんは、布団のなかで赤ん坊に乳を飲ませながら、寝言に近い、低くてはっきりしない声で赤ん坊をなだめる。主人の崔さんとその老母は、まるで何も聞こえなかったように寝ている。

オンドルは朝方になっても依然として温かい。わたしは背中でおンドルの余熱を感じながら、顔だけが布団の外の冷たい空気に触れた。

冬の日の朝の空気には新鮮な酸素がたっぷり含まれていて、息をする度に頭脳が一段と明晰になってくるような気がする。都会にはめったにないこの贅沢さを味わいながら、わたしは膀胱に尿が溜らないかぎり、いつまでも布団のなかにじっとしていたような気がした。

ここでは、呼吸するだけで自然の恵みと幸せを感じる。

午前 6:30

若奥さんが一番先に起きて台所に回る。しばらくすると、火おこし用の「電風扇」（電動扇風機）が回転する機械音や、釜に水を差す音が聞こえてくる。間違いなく竈の焚き口に火を入れ始めたのである。

午前 6:45

近所に住む親戚の1人が、みんなの寝ている部屋のなかへ入って来る。鎮センター

へ買い物に行きたいので、オート三輪車を貸してくれとのことであった。主人の崔さんは、鍵を渡してから再び寝てしまう。

寒いせいか、外では何度もエンジンを掛ける音が聞こえてくる。

午前7:10

近所に住む崔さんの兄が部屋のなかへ入って来て、まだみんなが寝ているのをみてそのまま撤退する。

特に用事がなくても、足の向くまま親戚や友人宅をひょいと尋ねることは、ここ田舎ではごく自然なことのようである。

午前7:50

わたしの隣で寝ていた主人の老母が起きて外出する。この日は近所で、ある老婆の「還甲」（還暦祝い）が行われるので、おそらくそちらへ足を運んだのだろう。わたしも還暦祝いが行われる家へ行って写真を撮ろうと思い、主人の崔さんより先に布団のなかから起き上がった。

旧正月からまだ3日しか経過していないので、村のあちこちで結婚式や還暦祝いが行われているのである。つまり、この時期は農閑期で、また金銭的にも比較的ゆとりがあるため、1年のうちに祝い事が最も集中している。当日村では2つの結婚式が同時に行われた。ところが崔さん夫婦は、御祝儀を出すのが大変なために、結婚式に出席するのを断念していた。ちなみに最近では、御祝儀の相場が50元以上だという。

午前8:00

主人の崔さんが起床。若奥さんがプラスチック製の赤色の盥（たらい）に洗顔用の湯を半分ほど入れて部屋のなかに入ってくる。先に勧められたが、わたしは先ずおしっこをして来るからと言って盥を家の主人に譲った。

外から帰って来て、わたしは石けんをつけるのが面倒だと言いながら、もってきたタオルを井戸水で濡らして顔を大ざっぱに拭いた。

わたしが盥で洗顔することを断った本当の理由は、前日の夜に、若奥様が同じ盥で赤ん坊のおしっこを受けていたのを目撃したからである。

午前8:20

朝食。食事には、崔さん夫婦とわたしのほかに、たまたま食事の時間帯に遊びに来ていた崔さんの友人である朴さんが加わった。

食卓にはご飯、味噌汁、漬物類、にんにくの芽を入れた卵焼き、鮎と青唐辛子を煮込んだ鮎鍋などが乗せられた。普段よりは少し豪華な食事内容である。

午前9:10

若奥さんは食卓を片付け、崔さんと友人の朴さんはタバコを吸いながらおしゃべりをし、わたしは横で2人の話を聴く。話の内容は、主に都会へ出稼ぎに行った村びとたちに関するものや、鎮センターのヤンスという名前のチンピラに関するものである。

午前10:00

わたしが還暦祝いの写真を撮ってから崔さんの家に戻って来ると、崔さんはもう1人の友人である金さんの家へ飲みに行こうとわたしを誘う。正月だから、今日は親友同士で金さんの家に集まって、1日を楽しく過ごしたいとのことであった。

午前11:30

崔さんの友人である金さんの家で、仲間同士による新春初の飲み会がはじまった。金さんの家に集まって来たのは、金さん夫婦のほかには崔さん夫婦、朝食を崔さんの家で済ました朴さんとその奥さん、わたし、それにもう1人の独身男である李さんで、合計8人であった。

金さん(34才)は、鎮センターの造酒工場でトラックの運転手をしており、妻は村立朝鮮族小学校で先生をしている。

朴さん(35才)は、家で大豆もやしを専門につくり、鎮内の各料理屋に販売している。わたしが約半年前に彼に会ったときは、近くの県営食糧倉庫で日雇い労働者として働いていた。彼の妻は、数ヶ月前から瀋陽市のある朝鮮料理屋で従業員として働いている。ちなみに北屯では、数年前から水不足でほとんど農業生産が行えなくなっている。

崔さん(34才)は小児麻痺の身体障害者であり、健常者と同じように仕事をするとはできない。1993年の12月から、彼はわたしの援助で鎮センターで小さな料理屋を経営するようになった。なお彼の19才になる若奥さんは、家で家事労働に専念している。

李さん(33才)は軽い精神分裂症にかかっており、いまだに結婚相手が見つからず、親と一緒に暮らしている。ちなみに彼は、数週間前に長春である漢族娘に手を出したために1ヶ月拘留されて釈放されたばかりであった。また、彼の父親は数年前までは村で屈指の金持ちであったが、今から約4年前に、共同事業をしていた吉林市のある人に資本金約10万元をだまし取られ、ほとんどの財産を無くしてしまった。それ以来、李さんの父親は誠実なキリスト教徒として毎朝村の集会所に通うかたわら、金をだまし取った男を捕まえようと、雨の日も雪の日も1日も休むことなく、ほかに仕事もしないで毎日汽車に乗って吉林市に通っている。現在家計はもっぱら李さんの母親1人に頼っており、具体的には鎮センターで山菜や焼き餅を売っている。

午後2:10

酒席が撤去され、娯楽の王様といえる賭けマージャンが始まった。男性2人（朴さんと金さん）は酒を飲み過ぎて横になっていびきをかく。女性3人と李さんがマージャン卓（食卓に毛布を被せたもの）を囲み、わたしと崔さんは横で観戦する。

夜8:30

マージャン中止。女性たちの手で再び酒席が設けられ、昼間と同じメンバーによる宴会が始まる。

皆が話し合った結果、次の日は朴さんの家に集合することが決まった。

夜10:05

みな遊び疲れ、各自の家に退散する。

2. ハルモニ（おばあさん）たちの生活と老人協会

川辺屯の60才以上の年寄りの人口は男性が8人（うち、漢族が1人）で、女性が17人（うち、漢族が2人）である。ここでは、世帯調査を行った70世帯のうち、ハルモニを抱えている15世帯についての調査結果を基に、農閑期を中心とする彼女たちの日常生活や近年における意識の変化及び老人協会の活動について触れる。

川辺屯のハルモニたちは、平均朝の5時から6時の間には起きて食事の支度をしたり、家に早起きの嫁さんがいてその必要のない者は、外に出て庭や野菜畑を見回ったりする。1983年以前の集団農業時代には、今より2時間も早く起きて食事の支度を始めなければ、イルクン（家事労働ではなく、外の田圃や畑で農作業をする男女の労働力）たちを7時前に仕事場へ送り出すことができなかったという。

ところが、家族単位で農業をやるようになってから、農民たちは集団労働の拘束から完全に解放され、好きな時間帯に仕事ができるようになった。そして若い女性たちも、以前のように朝早く起きる必要はなくなった。その結果、農繁期はともかく農閑期においてまで、年寄りのハルモニたちが朝食の支度をする風景がみられるようになった。

ハルモニたちの話では、決して朝食が作りたくて早起きしているのではないという。農作業のないときぐらい嫁さんにご飯を作ってもらいたいのだが、若い人たちはもはや以前のように早起きしないので、仕方なく自ら朝食の支度を始めるのだとある老女は語ってくれた。彼女たちが言うには、みんなの口に合うような料理をつくるのは大変なことであるに違いないが、嫁はもっと年寄りのことを大切にしてほしいとのことであった。なかには、この頃の嫁は年長者への礼儀を知らないだけでなく皆怠け者

になってしまい、年寄りを大切にしてきた古き良き伝統はもはや失われてしまったと嘆くハルモニもいた。

またそれとは逆に、朝鮮半島にいた頃に較べて、家庭内における礼儀作法が簡略化した現在のほうが、嫁にとってもほかの家族員にとっても気が楽で良いと言うハルモニも何人かいたことには驚いた。いずれにせよ、全国的に推し進められている改革开放政策は、古い習慣のすべてを否定する勢いで農村地域にも大きな影響を及ぼしており、家族における年寄りの権威が大きく揺らいでいるのは確かである。

午後になると、ハルモニたちは菜園の手入れをしたり、洗濯物を入れた盥を頭上に乗せて気の合う者どうしで連れ立って川辺の洗濯場に出掛ける。洗濯が済むと、一部の衣装には糊付けをして砧打ちやアイロンを施す。洗濯機のある家庭でもただそれを飾ってあるだけで、年に数回使うか使わないかである。これには、主に次の3つの理由が挙げられる。

まず、田舎では水道がないために、洗濯機で洗うことはできても濯ぎは槽外で行うしかないのである。次に、田舎では果物（すももや杏など）の汁や機械油などによる衣類の汚れがひどく、洗濯機で回すだけでは汚れが落ち難いばかりか、錆を含んだ汲みあげ式の井戸水により、白い服が却って汚れてしまう恐れがある。第3の理由は、何といても川で洗濯をするという昔ながらの習慣があるからである。広いところで洗濯するのは気持ちよいことだし、川辺はおしゃべりの場としてもなかなか快適である。特に夏の季節には、皆川や池など家の外で洗濯をするのを楽しみにしている。冬は寒いので主に家のなかで洗うが、その場合にも湯を沸かし、井戸水に含まれている錆を沈めてから手で洗う。

朝鮮族社会では、庶民は古くから白い衣装を好み、そのため朝鮮族はしばしば「白衣民族」と呼ばれることもあったが、今は年寄りだけが白い服を好んで着るようになっている。特に温かい季節になると、年寄りたちは一様に白いチマ・チョゴリを身に付ける。なお誕生日や正月などの「名節」には、色鮮やかなチマ・チョゴリを身に付けることが多い。男性の年長者は、「バジ」と呼ばれるズボンの上にチョゴリを着るのが習慣だったが、最近では年寄り層が減ってきたことや、中年以下の人は全員が漢族と同じ服を着るようになってきたため、男性の間では、民族衣装の姿がほとんどみられなくなっている。

一方、現在のハルモニたちの生活が全体的に以前よりずっと楽になったことは確かである。昔と違って各家庭では豚などの家畜類もほとんど飼育しなくなり、1960年代から1970年代にかけて盛んだった筵編みの副業も完全に姿を消してしまった。ハルモニ

ニたちだけでなく、ほかの家族員の労働量も以前より遙かに少なくなったといえる。

豚の飼育がなくなりつつあるのは、飼料が大幅に値上がったため、養豚が昔のように現金収入に結び付かなくなったからである。それに「生産責任制」になってから、生産性が普遍的に向上し、農業における収入も以前より大幅に増加した。だからといって、新しく何か現金収入になるような副業を始めるには、資金不足でこれもなかなか巧くいかないのが現状である。都会でも農村でも労働力はあまっている状況なので、村の若者は右へも左へも動けない状態にあった（ところが、半年後の第二次調査時には、多くの若者がすでに出稼ぎのために屯を離れていた）。

その結果、若者たちはますます年寄りの言う「怠け者」になり、酒を飲んで賭博をやるのが日課となってしまった。最近星火村では、一部の若い女性までがマージャンの魅力にとりつかれ、ハルモニたちの労働量は過去に較べて総体的に減ってはいるものの、なかにはやはり忙しくしている者もいる。孫のいる家庭では孫の面倒をみたり、せめて卵でも食べようと鶏や家鴨を飼っている家では、それらの飼育に追われている。

そのほかにも炊事の手伝いや、米に混じっている糠や石つぶ、虫などを拾ったり、家のなかの蠅をとったり、便所に灰を撒いたり、あるいは倉庫を見回り鼠の通り道を塞いだりしながら、一時もじっとしていられない者もいる。とはいっても、誰かの家に珍客が来たり、年寄りの誰かの誕生日だったり、あるいは村内で結婚式や赤ん坊の誕生祝いがあつたりする場合には、迷わず手を休めて呼ばれていくのである。

1日のなかで、ハルモニたちが最もゆっくりできるのは夕食の後である。片付けを終えてから、いつもの溜り場へ足を運んでおしゃべりをしたり、花札で遊んだりする。ハルモニたちにとって、花札は昔から続いている代表的な娯楽であり、現在の新しい傾向といえ、僅かだが金を賭けるようになったことや、ほとんど毎日村のどこかで花札で遊ぶ人がいることである。昔は大豆やとうもろこしの粒を小銭の代わりに賭けていた程度だから、金が賭けられるようになったことは、それだけ生活も豊かになったと言えるのかもしれない。なにしろ昔は、花札をやる暇も余裕もなかったのである。

夜の9時頃になると、ハルモニたちはそろそろ各自の家に戻り寝る準備をするが、少し中国語のわかる者は、11時近くまで家族の者と一緒にテレビをみたりする。あるいは、夕食を食べたあと村の広場などに集まって、「老人ディスコ」という新式の踊りを稽古する。

ハルモニたちは言う。昔は遊ぶことを知らないでひたすら働いた。言葉も習慣も異なる土地で生き残ることを考えた。しかし今は、農業技術が発展して年に2、3ヶ月働くだけで、残りの時間はみな自由に遊べるようになった。人びとはもう昔のよ

うに朝鮮人として肩身の狭い思いをしなくても済むようになった。誰かに拘束されるようなこともなくなった。洗濯の量も減り、全体の労働量は昔に比べてうんと少なくなった。これからは家族の者と仲よくし、残りの人生を存分に楽しみたい。しかし若い人たちは女を含めて農閑期には何もせず皆マージョンに耽っているのを見ると心が痛むし、また腹も立つ。食事の時間になっても家へ帰って来ないし、夜遅くまで遊んで朝は起きてくれない。この頃の若者といえば、年寄りの言うことはちっとも聴かないし、世の中の風紀も完全に乱れている。生活は確かによくなったが、みんなが幸せだとは限らない。

今から約10年前（1981年～1983年）、筆者は川辺屯によく遊びに行った。高校時代の親友がこの村に住んでいて、都市ではなかなか賞味できない食べ物を目当てに、月に1、2回は通っていた。あの頃はまだ「生産責任制」に移行していなかったため、仕事に対する農民の意欲も低かった。そして仕事のない日でも、農民は毎日仕事場へ向かわなければならなかったのである。その結果、家事労働の大半は年寄りのハルモニたちがすることになっていた。またその頃は、ほとんどの家庭で豚を数匹ずつ飼っており、その世話だけでも大変な労働であった。そのほかにも水汲みや炊事、洗濯、孫たちの世話にいたるまですべてハルモニたちが手伝わなければならなかった。当時は炊事用の燃料が腐った藁や干し草ぐらいで、火を起こすだけでも大変であった。それが現在では、ほとんどの家庭でプロパン・ガスや石炭を燃料としており、それに電気炊飯機も普及し、炊事は以前より遙かに楽になっている。また「1人っ子政策」により、孫の世話も以前ほど忙しくはなくなった。

娯楽に関していえば、十数年前までは花札は正月や祭りのときに限っての娯楽だったし、派手な民族衣装を着て踊りを楽しむ余裕などなかった。ましてや集団で大都会へ旅行に行くなど想像もつかなかったのである。

朝鮮族社会において、女性が男性より勤勉でよく働くことは広く知られている。なにかんづく現在の中国に生きる朝鮮族のハルモニたちは、移民一世としての苦勞も多く、昔ほどではないにしても、今なお若い人たちと同じように働いている者もいる。「生産責任制」が実施されて以来、農民は時間を自由に支配することができるようになったばかりでなく、農業生産における生産性も大幅に向上し、仕事の時間も大きく短縮した。

したがってある意味では、家族におけるハルモニの存在感が以前より薄れてきたといえる。だが、彼女たちこそ移民一世として、また伝統的な朝鮮族の女として一生を働き続けてきた典型的な存在である。彼女たちのお陰で、次の世代が異民族社会に巧

く溶け込み、二度と「ピョバジゲ」（骨がすり減るまで）働かなくても済むようになったのである。

「生産責任制」が導入される前まで、中国東北部の農村朝鮮族社会には、年寄りを大切にする風習から「読報組」（トッポジョ）と呼ばれる老人組織が各村に設置されていた。「読報組」は朝鮮族独特のものであり、付近の漢族村にはこれに相当する老人組織はなかった。「読報組」とは、文字通り「新聞を読む組」という意味だが、それを設置したそもそもの目的は、年寄りたちが定期的に集まって新聞を読むことで世の中を理解し、なおかつ識字率を高めることにあった。そのほかにも、村で何かトラブルがあった場合には、生産隊の幹部らに加えて、「読報組」の老人たちが出頭して問題解決に当たったのである。

とはいうものの、実際に「読報組」が上記のような役割を果たしたことは希有で、そこはただハラボジ（おじいさん）たちが集まって暇をつぶすところに過ぎなかった。言うなれば、そこはハラボジたちが寄り集まって将棋をさしたり、パイプをくわえて朝から晩まで世間話をするところだったとの見方が有力である。

近年、農民たちの生活が大きく改善されるにつれ、ハルモニたちもそれまでの忙しい家事労働から解放され、従来の「読報組」は老人たちの純粋な娯楽組織となり、名称も「老人協会」に改められた。改称後の現在は、ハルモニたちが当該協会の主役となり、定期的に旅行や遠足を組織したり、宴会や舞踊会を催したりしている。

今日の「老人協会」に対する資金援助は主に村政府からなされるほか、年寄りを抱えた各家庭からもなされている。「老人協会」にはまた付属の土地（水田と畑）と養魚池があり、自分たちが働くほか、若い人たちの手も借りながら資金づくりに取り組んでいる。

老人たちは、1992年度にそうした付属の土地の耕作をして約4,000元の収益を上げた。ある程度体力に自信のある老人は本人たちが直接農業生産に参加するが、そうでない場合には、家族員の誰かが代わりに出勤することになっている。

1992年現在、「星火村老人協会」に登録されている老人の数は80人余りである。同協会の規定では、年齢が50才以上であれば誰でも自由に入会できることになっているが、なかには入会費が払えないほど貧しかったり、自分が働けないがために嫁を代わりに働かせるのが嫌で入会していない者もいた。なおキリスト教信者たちは、一切老人協会に加入していなかった。

1993年春の老人協会の活動状況をみると、週に1回の割合で老人たちが集まって会食をしたり、踊りを楽しんでいた。目下、「老人協会」では新たな旅行を計画してお

り、行き先を長白山（白頭山）にするか、それとも北京にするか迷っているところであった。

「老人協会」ではまた、毎年の春と秋にはピクニックを組織し、春節や国際婦人デー、端午（陰暦5月5日）、秋夕（陰暦8月15日）などの「名節」には、連日宴会を催してさらに盛り上がる。このような消費行動は、以前なら贅沢な資本主義的な遊び方として批判されたに違いないが、今は村政府はもちろんのこと、中央政府もこれらの活動を支持しているとハルモニたちは話してくれた。

3. 娯楽の王様——マージャン

1980年代に入ってから、都市と農村を問わず全国各地では空前のマージャン・ブームが沸き起こった。これは一には、人びとが金銭的にも時間的にもある程度の余裕ができたことを意味し、二には、ギャンブルに対する政府からの引締が以前よりずっと緩くなっていることを意味する。

朝鮮族村において、花札やトランプによるギャンブルは古くから存在したものの、マージャンによるギャンブルが現れたのはごく最近のことである。星火村でも、1987年頃からマージャンがそれまでのトランプに取って代わり、未曾有の規模で流行るようになった。

マージャンによる博打を最も多くやるのは中年や若年の男性であり、近年では若い女性や中年女性も増えてきている。小・中学生は主にトランプ遊びをするが、マージャンの遊び方も日頃から見物してほとんどの者が知っており、なかには大人たちと一緒に遊ぶ者もいる。それに対して、ハルモニを中心とする年寄りたちは相変わらず昔ながらの花札をやっている。

川辺屯内の道を歩いていると、必ずどこかの家でマージャンパイを掻き混ぜるジャラジャラという音が聞こえてくる。それも毎日数ヶ所で大勢の人が遊んでいるため、いつ村を訪れても賭博の光景はみられる。賭け金の相場は季節によって異なり、賭け率の低い夏季の場合でも、運の悪い者は1日に50～200元は負ける。

賭ける金のない者は、横で見物するか道端に出ておしゃべりをする。会話の中身といえば、各地で多発している交通事故や強盗事件の話、テレビ番組におけるサッカーの話、親戚訪問先の韓国から帰って来ただれかれが裏ビデオを持ち込んだ話、またはどこかへ出稼ぎにでも行こうかなど話である。そのほか、半日も道端に座り込んで将棋をさしたり、昼間から誰かの家で酒を飲んだりして暇をつぶす者もいる。酒類は屯内の売店で購入するが、代金の支払いは秋の収穫後になることもしばしばある。

一時期娯楽の王様として君臨していたテレビに関していえば、面白い番組が少ないことなどから、現在では視聴率もかなり低下している。それに昼間はほとんど番組がないため、代わりにラジオを聴く人が現れた。そのほか、月に1回か2回ほど巡回してくる映画をみるのは、村びとにとってもう1つの楽しみになっている。

マージャンをやらない女性たちは、洗濯や炊事などの家事のほかに、おしゃべりを楽しみながら編み物をしたり、幼稚園に行く前の子どもたちと遊んだりする。そして夜になると、中国語のわかる中年以下の若い女性たちはテレビ・ドラマをみたり、雑誌や小説を読んだりする。また天気の良い日には、広い庭に集まって、ハルモニたちと一緒にカセット・テープレコーダーから流れてくる音楽のリズムに合わせて流行のダンスを踊る。

小学生くらいの子どもたちは、トランプで遊んだり、川へ行ったり、または隠れんぼや縄跳び、自転車乗り、面子（メンコ）などで遊ぶ。

星火村で娯楽の王様がマージャンだとすれば、その次に位置するものは飲酒である。男性は言うまでもないが、女性もまたよく飲む。若い女性たちは普段はあまり飲まないが、正月や「三・八婦女節」（国際婦人デー）、「端午節」（陰暦5月5日）、「中秋節」（陰暦8月15日）、運動会、舞踊会などの祭日、村びとの結婚式、誕生日などにはビールはもちろん、強い「白酒」まで飲む者がいる。そしてハルモニたちは、老人協会を通して少なくとも月に2、3回は飲む機会を設けている。

酒を飲むときには、老若男女が一堂に会して食卓を囲む場合もあれば、年寄りと若者が別々のグループに分かれて飲む場合もある。そして、一緒に酒を飲むときには互いに杯を勧めるのが習慣であり礼儀である。未成年者による飲酒も一般に許されており、年寄りの前で若者が飲酒することは、飲酒マナーにおける儒教的伝統がかなり薄れてきていることを意味する。

若者が酒を飲んでトラブルを起こすことはしばしばである。たとえば酒のつまみ用に、他人の養魚池の魚や鶏、家鴨、犬などを盗むことがその一例である。実際川辺屯では、盗みが原因で犬が絶滅する事態にいたっている。ちなみに第一次調査時の1992年7月には、漢族家に犬が1匹残っているのみであった。

また、約半年後の第二次調査時にも、2人の若者が同屯のある家の鶏を10羽盗んで問題になっていた。

この経緯は、数人の若者が夜中に酒を飲んでいて、途中でおかずが足りなくなり、2人の若者がある家の庭に忍び込んで鶏を2羽盗み、残りの8羽も間違えて煙で殺してしまったのである。鼬（いたち）による被害を防ぐために、夜は必ず鶏を密閉され

た小屋に囲んでおくが、それを盗むには、人間は鶏小屋の入り口のなかに頭を突っ込まなければならない。問題になった若者の1人がまず頭を鶏小屋のなかに入れて鶏を捕まえようとしたが、なかが暗くて失敗した。そこでもう1人の若者が、藁に火をつけてなかを照らすように勧めた。2人は結局2羽の鶏を捕まえて帰ったものの、残りの8羽まで煙のせいで全部死んでしまったのである。

2羽だけなら、鶏の持ち主（金さん家のハルモニ）もそれほど問題にしなかったかもしれない。ところがハルモニにしてみれば、自分がいままでに心を込めて飼育してきた鶏を一夜にして全部亡くしてしまったのである。

数日後、ハルモニはついに「主犯」を突き止め、彼の親のところへ苦情を言いに行った。結局150元の弁償金で問題は解決され、今回もそれほど大きな騒ぎにはいतरらずに済んだ。

男たちは、暇つぶしのために賭けマージャンをやり、大金のない場合にはそれほど金のかからないタバコや酒などを賭ける。そして負けた者には、上記の方法でおかづを「調達」させるのである。

村では、暇な時間を消化することが仕事以上に大事であるような感じさえ受ける。特に若い男たちは、何か刺激的なことをやって暇な時間をつぶさずには居られない様子であった。犬は以前には多くの家で飼われていたが、今は完全に姿を消してしまった。このような状況の下では、北屯の若者たちが退屈なあまりに、石ころを投げつけて目抜き通りの街路燈を全部つぶしてしまったことも、何だか理解できなくもないような気がする。

ところが、1993年の春から、マージャンをやる人が俄然減った。特に大金を賭けてマージャンをやる者がずっと少なくなった。集団農業から請負制農業に移行して約3年の間は、生産性の著しい向上により、農民の生活が改善されたことは確かである。だが、その後すぐに追隨してきた物価の上昇（米価は不変）により農民の生活は再び厳しくなった。貯金の苦手な朝鮮族は、ギャンブルや飲酒などで、あるだけの金を屯内の漢族料理屋へもって行って使い果たしてしまう。特に北屯では、金が朝鮮族のふところから、漢族が経営する料理屋を経て絶えず漢族のふところへ流れ込むかたちになっている。

朝鮮族は、「生産責任制」が実施されて以来稼いだ金を、ここ数年余りの間にほとんど使い果たしてしまった。そこでかれらは、再び金を稼ぐ必要に迫られ、とうとう今日のような三大出稼ぎブーム（都市でのキムチ商売・海外や大都会における韓国系企業での労働・遠近の町や都市における料理屋の経営）を創り出したのである。

漢族は、一銭の金でもこつこつと溜めようと努力するが、朝鮮族はあるだけの金を全部使ってしまうと気が済まないようである。タバコは高級なものを吸おうとするし、飲酒にも大金をかける。漢族もマージャンをやるが、朝鮮族のように1年中やるわけではないし、また儲かった金については朝鮮族のように浪費したりしない。かれらはどちらかというと、金を溜めて家を建てたり、結婚式に大金を注ぎ込むのである。それに対して、未だに流浪民の性格を捨てきれずにいる朝鮮族は、遠い将来のことまであまり考えていないようであった。飲酒に金を掛けすぎることを反省している者もなかにはいるが、先祖から譲り受けた習慣をそう簡単に変えてしまうことはできないのであろう。

Ⅲ. 信仰生活の再開とその背景

1. 朝鮮族社会におけるキリスト教の復興

キリスト教が延辺（旧「間島」）を中心とする中国朝鮮族社会に浸透し始めたのは19世紀末から20世紀初期にかけてであり、最初の朝鮮族キリスト教会が設立されたのは、1889年に吉林省集安县においてであった【金 1993: 237-258】。キリスト教はそのほかの民俗宗教²⁰⁾とともに朝鮮族社会に浸透したが、1949年に中国共産党が政権を担当して以来、全国規模で宗教や迷信を排除する運動が行われ、文化大革命（1966-1976）の頃になると朝鮮族の諸宗教は跡かたもなく一掃されてしまった。ところが1970年代末から、部分的にはあるがキリスト教会が再建されるようになった。さらに1980年代に入ってから、政府によって信仰の自由が認められるようになり、朝鮮族社会では空前の「イエス教」²¹⁾ブームが沸き起こった。現在では、朝鮮族社会のほとんどの地域、特に農村ではほとんどの村においてキリスト教会もしくは集会所が設立されている。

調査地の星火村では、少し遅れて1987年に「星火村イエス教会」が発足した。教会発足時の信者数はわずか3人で、しかも全員が年配の女性であった。この3人の女性

20) 中国東北部で盛んだった朝鮮族の民俗宗教として、20世紀初頭に朝鮮半島で出現した天道教、侍天教、青林教、大宗教及び「間島」(延辺) 地方で出現した元宗教などを挙げることができる。これらの宗教のほとんどは、檀君崇拜や儒教、仏教、道教などの思想を摂取して成り立ったものであり、19世紀末より20世紀初期にかけて朝鮮半島で民族危機が深まりつつある状況のなかで相次いで出現したものである【金 1993: 237-258; 李 1987: 237-266】。

21) 朝鮮族はカトリックのことを「天主教」と言い、プロテスタントのことを「イエス教」または「基督教」と言う。したがって本稿でいう「イエス教」は、すべてキリスト教におけるプロテスタントを指すものとする。

がキリスト教を信じるようになったきっかけは、いずれも隣県の大教会「明城镇五星基督教会」²²⁾（以下「明城教会」と略す）から伝道を受けたことにある。その後信者数は徐々に増え続け、1993年8月現在に登録されている信者数は60人余り（うち、男性が約3割）である。

「星火村イエス教会」が成立して今日にいたるまでの経過や、村びとが入信する具体的な理由を把握するために、わたしは当教会の最高責任者である主執事（女性、56才）と1人の一般信者（女性、43才）からそれぞれ話を聴取した。以下の内容は、そのときに収録した話者の口述を整理し訳出したものである。

2. 信者のインタビュー

a. 主執事朴氏の話

1993年8月10日

わたしの信仰生活は今年で7年目に入ります。もっとも、わたしが生まれて2才から14才までに、何も知らないで母親に連れられて教会（吉林省懷徳県）に通っていました。あの頃はまだ「解放」（1949年）して間もなかったので、立派な教会がたくさん残っていました。ところが解放後の数年の間に宗教や迷信などを排除する「三反運動」が始まり、わたしたちはそれ以来ずっと教会へ通うことができませんでした。

わたしがこの星火村で宗教活動を始めたのは1987年のことです。実を申しますと、わたしが今住んでいるこの家は文化大革命のとき漢族のキリスト教信者たちが隠れて信仰活動を行っていた場所です。その恩恵を受けて、わたしはこの家に引っ越してきたその年から熱心にイエス様を信じるようになりました。

わたしが入信する当時、この村ではまだ誰も宗教のことを知らなかったので、今のように公の信仰生活はできませんでした。ある日、隣県の「明城教会」から72才になる1人のイエス教「伝道員」がこの村へやって来て、聖書を1冊くれたほか讃美歌を3曲教えてくれました。そのときこの村で伝道を受けた人は3人で、わたしはそのうちの1人でした。その翌年、他村に住んでいたわたしの1人の姉も信者に加わり、合

22) 「明城教会」は、吉林地区最大（約300人収容）の朝鮮族キリスト教会の1つとして知られている。永吉県と接している磐石県の明城镇に位置し、星火村からは汽車で約4時間かかる。星火村イエス教会が必ずしも明城教会と組織的なつながりをもっているわけではないが、以前に同教会から伝道を受けたことから、ある程度の影響は受けているといえる。筆者は調査期間中に一度だけ明城教会を訪れたことがあるが、当教会は朝鮮族教会の特徴を色濃く保っており、信者たちは床に座布団を敷き正座して礼拝を行う。なお当教会では、遠方から訪れてきた信者たちのために宿舎や食堂を用意しており、伝道を受けに来る人たちのために細心の配慮がなされている。

計4人でこの家で聖書を勉強し始めました。

その頃、鎮センター（星火村から約1.5 km離れたところにある樺皮廠鎮政府の所在地）にはすでに漢族信者のためのイエス教会がありました。わたしたちは言葉上の関係で漢族教会へは行かなかったのですが、そこにも2人の朝鮮族信者がいることをあとから聞いたものですから、ある日わたしたちは漢族教会へ行ってみることにしました。漢族教会で信仰生活をしていたその2人は、わたしたちの存在を知って驚きと喜びの気持ちを隠せませんでした。こうして、わたしたちのグループは4人から6人に増え、その後さらに12人に達しました。

ところが、間もなく漢族教会から来た2人のうちの1人が自宅から通うのに遠くて不便であることを理由に、8人の信者を連れてわたしたちから分離して出て行ってしまいました。それどころか、出て行く際にみんなの貯金まで全部もって行ってしまいました。わたしは納得がいかなくて「なぜハナニム（神様）のお金を全部もって行くのか」と質問しました。それに対して相手は、「ハナニムの意図にしたがってお金をすべて漢族教会に納めました」と答えました。いくら争ってもお金は戻ってきそうもなかったので、わたしはとうとう諦めました。聖書には「下着を欲しがる者には上着まで脱いで上げなさい」と書かれています。

それから数ヶ月後、わたしは偶然町でお金をもち出した当人に出くわしました。彼女は、先にわたしに声をかけ、「あれ以来良心の呵責を受け、明城教会へ行行って懺悔して来ました」と言うではありませんか。

その後、さらに2人の信者が星火村を離れてほかの教会へ行行ってしまいました。つまり、その頃にこの村で信仰活動を行っていた者はわたしと夫だけとなったのであります。わたしは悔しくて悲しくて毎晩ハナニムに祈り続けました。やがて、ハナニムのほうからも本当に応答して下さいました。ハナニムははっきりした言葉でわたしに「おいで、おいで」と呼んで下さったのです。そこで、わたしはまず明城教会へ出向くことにしました。当教会の執事は、わたしに「絶対村を離れるな」と指示し、「祈り続けると必ず祝福される日が来る」と励ましてくれました。

その後間もなく、お金をもち出した人を含めて4人の信者がわたしのところへ戻って来ました。それ以来信者数は急激に増え続け、最高60人あまりまで増えたことがあります。

その後、わたしは県政府から星火村で信仰活動を行うための許可証をもらうことができました。ところが、ご覧のように資金不足でいまだに教会らしい教会を建てることもできない状況です。現在の集会所はあまりにも狭いので、せっかくほかの村から

やって来た信者たちも、結局は各自の部落で地域別に礼拝を行うほかありません。

約60人の信者のうち、男性が20人ぐらいいましたけれど、最近若い男性信者は全員が出稼ぎのために村を離れてしまいました。今定期的に集まってくる信者数は30人余りで、そのうちの6人は年寄りの男性です。それから、4人の信者は4～5 km 離れたほかの村から、毎週の日曜礼拝のときだけここへ通っています。

明城教会の教理は、韓国の純福音教会²³⁾の教理と相通じるところがあると言われていますが、わたしたちの場合は、純福音教会のように「按手」(手かざしによる治病)は行いません。わたしたちは、患者さんを苦しみから救うためにひたすら祈禱を行うのみです。もちろん按手して病気を治せる牧師さんも世の中には大勢いますが、一時期は偽物の按手師があちこちに現れ、教会の信用を大きく傷付けました。現在、政府当局は按手を厳しく取り締まっているだけでなく、さまざまな形でわたしたちの宗教活動を監視しています。政府は表向きには宗教の自由を認めていますが、実際はあまり賛成していません。外国(韓国)からお客さんが来てもすぐ調べに来るし、外国人信者の献金まで没収してしまいます²⁴⁾。

イエス様を間違えて信仰すると鬼神(キウィシン)になります。治病にこだわり過ぎると、神秘主義に走ってしまう恐れがあります。でも、何と言ってもイエス様の力は最高至上のものであります。韓国に多数存在する祈禱院もまたそうですが、そこにあるのは超能力ではなくイエス様の力なのです。これはまた中国で流行っている気功術とも違います。気功術は鬼神の力の一種で、鬼神もときにはイエス様の恩恵を受けます。でも、いかなる場合においても鬼神はイエス様の力には及びません。

隣村のある有名な気功師が、イエス様を信じてみようとか某教会へ通い始めたのですが、ある日教会で気功術を披露することになりました。ところがどうしても巧みいかず、結局イエス様の力によって気功は打ち負かされてしまったのです。これはつまり、イエス様に勝てる神はどこにも存在しないということです。われわれ人間も含めて、この世の万物はハナニムであるイエス様が造られたのですから、わたしたちが信じるハナニムはイエス様のみです。

23) 「ヨイド純福音中央教会」は、Assemblies of God 教団に属するペンテコステ系の韓国教会で、1958年にチョー・ヨンギ牧師を含めてわずか5人から始まり、1981年の教会創立23年目には信者数世界一となった教会で、1992年5月現在における当教会の信徒数は約70万人とされている。

24) 最近韓国のキリスト教徒による資金援助が厳禁されており、各教会が以前に受け取った寄付金はすべて政府当局に返納することになっている。その主な理由は、異端と見なされるさまざまな韓国人宗教団体が中国に進出し、朝鮮族社会で大規模な伝道活動を行い、中国社会に多大な悪影響を及ぼしていると中国当局が判断したからである。

イエス様は、「この世には必ず終わりが来る。終わりに近付くほど、この世には偽物のイエス・キリストが大勢現れる」とおっしゃいました。去年の「十月福音」事件（1992年10月28日にキリストが降臨するというデマによる信徒たちの殉死事件）がその証拠の1つです。この事件のせいで、各地で多くの信者が信仰を捨ててしまい、また政府側もわれわれの宗教活動を抑制し始めたのです。確かに、辺鄙な山村などでは韓国の異端宗教の影響を受けた者も多いようですが、最近ではみんな悟ったようです。

韓国では、なにに教派というふうに区別していますが、中国では教派は問いません。教会は違って信じるハナニムはイエス様だけです。また現在では、韓国の牧師や伝道師が中国の教会へやって来るためには、中国側の教会組織を通さなくてはなりません。

中国にはまだ牧師が少なく、現在朝鮮族の牧師は延吉に1人と瀋陽に1人いらっしゃるのみです。牧師や伝道師、長老になるためには、瀋陽か南京にある神学校を卒業しなければなりません。明城教会には権事が1人と執事が12名いますが、権事は女性の方で、今回特別に長老に昇格することになりました。

わたしがイエス様にしがったのは、「復活」を信じたからです。わたしは別に体が弱いわけでもなく、ただ現世に対して失望したからです。伝道を受けるその日に、わたしは半日も掛けて例の「伝道員」を問い詰めました。「イエス様を信じたらどんな利点があるのか」、「天国へはどうやって行けるのか」など疑問に思ったところはすべて質問しました。今になって考えてみると、当時その方は「啓示録」を以てわたしの質問に答えていたのです。

イエス様を信じるからといって、瀕死状態にある者が生き返るとか、万病が直ちに治るとかいうことはありません。でも、薬もそもそもハナニムが造られたものですから、イエス様を信じる者には病気が早く治る可能性も十分あるわけです。それに病気というのは、人間自身の原罪からも生ずるものであって、イエス様を信じる最終目的は、この世が終わる頃にイエス様と一緒に「永生」することです。

b. 一般信者李氏の話

1993年8月17日

わたしがイエス教を信じるようになったのは今から約2年前のことです。家庭のさまざまな悩みを解消するために、ある日わたしは決心して教会へ通うことにしました。初めは教会へ通うこと自体がとても恥ずかしかったのです。というのは、周りのどの信者をみても、病気で悩んでいる者や経済的に苦しんでいる者ばかりで、しかも中年

以上の女性がほとんどだったからです。でも、そう思うと同時に一方では「これらの信者たちは身体的には正常な人間と違うかもしれないが、頭脳は普通の人間と変わらないはずだ。それなのになぜ存在もしないハナニムを信じているのか」と不思議に思えてなりませんでした。年配の方は暇潰しに教会へ通っているとしても、そうでない者はどうしてイエス様を信じるのかが理解できませんでした。さらに、お金をやると言っても早起きだけはできなかった怠け者が、イエス様を信じるようになってからは、祈禱するために毎朝3時に起きて教会へ足を運ぶ（「早朝礼拝」）ようになったことについてはなおさら不可解でした。このことは言わば、世の中にはお金よりも強い力がどこかに存在することを意味するわけです。

2回、3回、4回と教会へ通う回数を重ねていくうちに、偶然かもしれないが、また奇跡ともいえる数々の出来事が重なっていきました。ハナニムが存在するという証拠があまりにも多かったので、しまいにはイエス様を信じざるを得なくなりました。旦那とあれだけ仲が悪かったある女性が、イエス様を信じるようになってから急に和気藹々な家庭生活を取り戻したかと思うと、アル中で長年家族の者を悩まし続けてきたある年寄りの男性が、教会へ通うようになってから、ある日突然お酒をやめてしまった例もあります。

実を申しますと、わたしは息子（22才）の勧めで教会へ通うようになりました。わたしに先掛けてイエス様を信じ、またそれによって腰痛を治した妹がある日息子を教会へ連れて行ったのです。数日後、息子はわたしにイエス様を信じると病気も治るし、心配事も全部消えてしまうと真面目な顔で言うのです。普段は親の言うことすらまともに聴かない息子が、その日ばかりはあまりにも誠心誠意に話していたので、正直に言ってわたしは感動してしまいました。息子よりも、わたしのほうが10倍も20倍も家族の幸せを祈っていたからです。

教会へ通う回数を重ねていくうちに、確かに頭痛も治り、長年患っていた胃の病気もよくなりました。数年前のことですが、わたしは胃潰瘍で手術を受けたことがあります。それ以来ずっと漢方薬を飲み続けましたが、イエス様を信じるようになってからは、薬を飲まなくてもまったく胃が痛まなくなりました。夜中に礼拝を終えて家に帰って来ると、なんとおなかが空くようになったのであります。つまりイエス様を信じてから初めて食欲がわいてきたのです。これは本当に奇跡と言うしかありません。そのときはただ、なぜわたしがもっと早くからイエス様を信じなかったのかという悔しさに一杯でした。それ以来、わたしはイエス様を信じる喜びは実に絶大なものであることがわかりました。はじめは、イエス様を信じる者はみんなばかにしかみえなか

ったのですが、今はイエス様を信じる者こそ一番賢いということがわかりました。

イエス様を信じる前に、わたしは主人といつも喧嘩ばかりで、離婚する寸前にまできていたのですが、イエス様を信じるようになってから状況は一変しました。わたしはとにかく我慢することに徹しました。いつか主人に理解してもらえる日がくることを信じながら待ち続けました。主人は普段マージャンしかやらない人間で、お金もずいぶん使いました。少しでも負けたらわたしは悲しくて主人を責めるばかりでしたが、今は主人が何をしようとわたしは責める気も悲しむ気もまったくありません。

人の話によりますと、主人は外で「女房はイエスか何かを信じるようになってから性格までよくなって、わたしがギャンブルで金をすっても何も言わないし、すっかり感動している」と言いふらしているそうです。今年に入ってから、夫婦喧嘩はまだ一度もしたことがありません。わたしが家で聖書を書き写していると、寄って来て手伝ってくれるかと思うと、ときには家事まで手伝ってくれるようになりました。

わたしには20才になったばかりのもう1人の息子がいますが、あの子については村中の人が知っています。というのは、あの子は生まれたときから今まで、なぜか寝ている間に必ず夢をみながら布団におしっこをするのです。そのため、ほかの子どものように遠くにある有名校に進学させることもできませんでした。頭がばかだったらわたしも諦めたでしょうが、勉強だけは幼い頃からよくできました。人様に言えないような病気でしたので、あの子も悩み、わたしもまた悩みました。医者にかかっても、またいろんな薬を使ってもまったくの無駄でした。そこである日、わたしは息子に教会へ通うことを勧めてみました。でも、「ハナニムよりも科学を信じなさい」とわたしは却って息子に説教されてしまいました。仕方なくわたしは独りでひたすら息子のために祈り続けました。わたしの病気が治ったのだから、息子の病気も必ず治ると信じて熱心に祈りました。ところが、息子は大学の受験にまで落ちてしまい、病気も一向に治りませんでした。ちょうどその頃、わたしは無性に明城教会へ行きたくなりました。

ある日、わたしは息子の機嫌のよいときによく息子を説得して一緒に明城教会へ行くことになりました。信じられないかもしれませんが、その日の夜から息子の病気が奇跡的に治ってしまいました。他所の教会で寝泊りするので、わたしは息子の病気がとても気になっていたのですが、当日の夜もまた翌日の夜もまったく無事でした。

家に帰ってから約一週間後、広州に住んでいる親戚から手紙が来て、ある韓国系企業が、高卒でしかもイエス教を信じている若い男性従業員兼通訳を1人募集しているとのことでした。その頃息子はまだ完全にイエス様を信じていたわけではありません

が、一週間過ぎても例の病気が再発しなかったのも、ある程度は信じるようになっていたと思います。大学受験にも落ちたし、家にいてもどうにもならないところにそのような手紙が届いたので、間違いなくハナニムの恩恵だと思いました。

息子を広州へ行かせてからも、わたしは心配でハナニムに祈り続けました。それから約4ヶ月後に、息子がお正月休みで帰省しましたが、その間に病気は一度も再発したことがなかったとのことでした。広州では4人の韓国人と一緒に暮らしていたそうですから、もしベットを臭わせたら直ちに隔離されたはずですよ。韓国人は特に清潔好きですから。話によりますと、会社では社員がなにげなく頭を掻いても、直ちに頭を洗って来いと叱られるそうです。

息子は今熱心なイエス教信者になっています。あなた（調査者としての筆者）が今日わたしの前にこうして現れたのも、あなたのお母さんがイエス様を信じているからでしょう。そしてあなたもいつかはイエス様を信じるようになるでしょう。

3. 分析

以上の話からわかるように、人びとがキリスト教信者になる主な理由は、身体的に病弱だったり、経済的もしくは家庭的な悩みを抱えていたりすることである。たとえば長年疾病に悩まされながらも、さまざまな理由により病院では有効な治療が受けられなかったり、家庭内のトラブルとくに姑と嫁との間に亀裂が生じたり、または夫のギャンブルで家の経済が危機にさらされたときなどがそうである。したがって伝道する側としても、まずそうした人たちをターゲットに「福音」を伝えるのである。

また村びとたちの話によれば、上に挙げた例のほかにも次のような人たちが一般的に信者になりやすいという。

- 1) 1940年代、あるいは朝鮮半島から中国へ渡る以前からキリスト教を信じていた人たち。
- 2) 幼い頃に親に連れられて教会へ通ったことのある人たち。
- 3) 韓国に親戚がいて、長年の文通もしくは親戚訪問をきっかけに伝道を受けた人々たち。
- 4) 好奇心にそそられ教会へ遊びに行き、そのうち信者になった人々たち。
- 5) 信者である家族員の勧誘で教会へ通い出した人々たち。
- 6) 現世を空しくして短いものと感じ、死んでから天国へ行く一念で信者になった人々たち。

以上、朝鮮族とくに農民たちがキリスト教に入信する理由について述べてきたが、

それとは逆に、現に信者になりたくてもなれない人も少なくないことをここに併記しておきたい。たとえば本人が共産党員の場合や、夫婦の片方（特に男性）が共産党員で妻（もしくは夫）が入信することに反対する場合がそうである。そのほかにも、教会に対してまったくヨムボ（「寄付」）する能力がない（特に都市部において）ために、教会に通うことを断念している者もなかにはいる。

他方では、一旦は信者になった者が脱会したり、教会に通っていた者が途中でやめしてしまうこともある。たとえば何回か教会に足を運んでみたところ、少しも愉快的気分が味わえず、信者たちがまるで気違いみたいに祈ったり泣いたりする光景をみてやめる人もいれば、出稼ぎなどのために、それ以上地元の教会へ通うことができなくなった人もいる。

星火村におけるキリスト教信仰の現状についていえば、長年姿を消していたキリスト教が同村に紹介されてからまだそれほど年数が経っていないこともあり、大部分の村びとはまだ宗教そのものについてほとんど何も知らない状況である。だが時間の経過とともに、そして中国政府が改革開放路線を今後も続けていく限り、ますます多くの人が宗教とくにキリスト教に対して理解を示すようになることは間違いないと思われる。キリスト教が紹介されてから間もない頃は、信者たちが道端で後ろ指さされたり、面と向かってからかわれたりすることもよくあったが、今はそのようなことがほとんどみられなくなった。今はむしろ、信者でもない人たちが、讃美歌の歌声が美しいと言って集会所の回りに集まって「音楽」を楽しむなどして、徐々にではあるがキリスト教というものに興味を示す者が増えているのが現状である。

お わ り に

1983年に「生産責任制」が実施されてから農業生産の合理化は大幅に進み、農民の就労時間も著しく縮小した。その結果、余剰労働力は農村から都市へ、国内から海外へと流出した。なかでも、多くの若い女性たちが農業をやめて順次都会の第三次産業へと転進した。出稼ぎ帰還者たちは瞬く間に豊かな生活を実現し、農業一辺倒のひとびとに大きな刺激を与えた。また韓国における労働市場の開放及び韓国企業の対中進出は、かつてない大量の朝鮮族農民を出稼ぎの途につかせた。その意味で、同民族としての韓国人は戦後初めて中国在住の朝鮮族に大きな恩恵を与えた。とりわけ韓国企業の対中進出は、朝鮮族に数多の経済チャンスをもたらした。だが他方では、朝鮮族社会に後述のようなさまざまな悪影響を与えたのもまた事実である。

近年、無数の韓国企業の対中進出に伴い、天津、青島、北京、大連など多くの都市において韓国人相手の各種サービス業が急増した。ここでわたしは、調査期間中に大都市天津で旧友に逢ったときのことを思い出した。

久しぶりの再会を祝い、当日の夜は2人で韓国人向けのナイトクラブで一杯飲むことになった。青島（チンタオ）ビールをまだ一杯も飲み終わらないうちに、早くもミニスカートの女性従業員からダンス・フロアーに誘い出された。腰に腕を回して5分ほど踊っただろうか。彼女はにっこりと笑い、「わたしが誰なのかご存じですか」と言った。強烈な香水の匂いが漂う彼女の体に一層近づき、化粧した顔をじっと覗き込んだ。「本当に分かりませんか」と再度尋ねられたとき、わたしは初めてあの特徴ある声を思い出し、息を吞んだ。まさかこのような場所でフィールドの1人の案内人の若妻に出会うとは夢にも思わなかった。わたしは調査地を訪れる度に彼女の夫と酒を飲み、彼女の手料理をいただいたのも2度や3度ばかりではない。土産に西瓜と葡萄を持参し、彼女に大層喜ばれたこともあった。彼女の声は柔らかく女性らしさに満ち、わたしに対しては常に敬語を使っていた。その彼女にフィールドから数千kmも離れた天津市で、しかも「夜總會」（ナイトクラブ）で再会するとは夢にも思わなかった。彼女は、われわれが店に入ってきたときにすぐわたしに気づいたと言った。

店の玄関まで見送り、彼女はわたしの頬に軽く口づけし別れを告げた。当日の夜は、調査地の人びとを思い出しながら複雑な心境に陥った。彼女と同じように都会で働く朝鮮族女性はどれほど多いただろうか。家族の者はおそらく彼女たちが外地で普通のレストランの従業員として働いていると思っているのだろう。実際、筆者もそれまではずっとそのように思っていたのである。「改革開放」がこのようなかたちでフィールドを襲うとは調査地では想像もつかなかった。筆者は「満州国」時代に書かれた『満州紀行』という書物のなかで、当時の貧しい朝鮮族女性たちが日本人を相手に夜の商売をしていたことを知り、驚くと同時にもう2度とそのような時代は来ないだろうと思っていた。それが半世紀経った今、相手は日本人から韓国人にすり変わったものの、昔とまったく同じことが繰り返されようとしている。だが一方では、彼女たちのお陰で家族や故郷の生活が次第に豊かになっていることもまた事実である。

こうして現れた経済変化は、朝鮮族農民たちの意識にもさまざまな変化をもたらした。社会主義建設の過程において儒教思想は批判され、古い道徳観念は葬られた。儒教意識が希薄化するに従い、嫁と姑の葛藤は表面化し、若者は年寄りの前で平然と酒やたばこをやるようになった。また移住生活を繰り返しているうちに、父系親族集団に連帯感を与えるはずの族譜を全て紛失し、伝統社会において大切だった祖先祭祀の

儀礼も大部分は消滅した。そして「名節」の日には、伝統を嘲笑うかのようにマージャンによる賭博が中心行事となった。

一方、急激で大規模な経済変化のなかにありながら、根本的に以前と変わらない部分も少なくない。なかでも、人間が生きていく上で最も大切な部分である食生活や言語生活ではさほど大きな変化はないといえる。漢族の食事文化を採り入れつつも自民族の食習慣を堅持し、同民族同士で話しをする場合には老いも若きも自民族の言語を多用する。そして、儒教的伝統が廃れていくなかにありながら、年長者を敬う孝の精神は本質的に変わっていない。朝鮮族は今、死んだ者を供養するよりは生きている親を大事にすべきだと強調するようになった。

女性について言えば、生産性の向上により家畜の飼育を含む重い家事労働から解放され、「1人っ子政策」の下に子育ても楽になった。年寄りのハルモニたちは新たに老人協会を組織し、集団で旅行が楽しめるまでになった。

急激な社会変化のなかで精神的な寄りどころを失った一部の人は、キリスト教を通じて新しい精神生活を獲得した。さらに多くの人は、生産性の向上により従来より倍以上も長い余暇を手に入れた。しかし人びとは果てしなく続く退屈な時間と戦わねばならなくなり、暇の消化に男たちは賭博や飲酒に明け暮れ、生産性の向上により一旦は実現した富は砂漠の雨のごとく消えていった。

家庭経済の崩壊に直面した一部の農民は、借金して漬物や衣類の行商のために、または料理屋を経営する目的で都会を目指した。ある者は成功し、ある者は金だけ使い果たして帰還した。借金すらできない家庭では、男が建築現場にでも出掛けて働けば良いのだが、農業しかやってこなかったかれらは、残念ながら都会の孤独に耐え得る精神力を備えていない。中国語を漢族ほど流暢に話せないという言葉上のハンディキャップのほか、漢族に較べて職業選択の幅が狭いのも事実である。地元の漢族は農業以外にもさまざまな副業を営んでいる。ロバ・タクシーを経営する者もいれば、埃まみれになって建築現場で働く者や慎重しく雑貨店を経営する者、馬糞の粉を吸いながらたくましく露天商として一生を生き続ける者もいる。それに対して朝鮮族男性は、たとえ餓死しても上に挙げたような仕事はしないだろうという。

実際星火村では、調査期間中に1人の中年男がそうやって死を選んだ。家庭経済が崩壊する寸前にあったにも拘わらず、男が家を離れようとしなかったために、妻が率先して都会のネオン街に足を踏み入れた。いくら妻から一般レストランだから安心してと言われても、男のプライドはそれを許せなかった。妻が出掛けていった3日目に、男は大量の酒を飲み、悔しさと幼い子ども2人を残して死んでいった。後日聞いた話

だが、その未亡人は今瀋陽で或る韓国出稼ぎ帰還者（朝鮮族）の愛人になっているという。

異民族支配の社会において、エスニック・マイノリティが職業選択の際に受ける制約は多岐に亘り、外的なもののほかに内的なものも含まれる。内的制約はまず、エスニック・マイノリティがもつ文化のなかにある。かれらが自民族の伝統を固守している限り、自民族文化の拘束から完全に抜け出すことはできない。一例を挙げるなら、朝鮮族にとって「白丁」（賭殺業者）は古くから賤民と見做されてきた。そのために、今でも人間らしく振る舞うことのできない者は「白丁の仔」として罵倒される。このような自文化の制約から、朝鮮族は事実上自らの職業選択肢を減らしているのだ。もう1つの内的制約は、エスニック・マイノリティが支配民族と同じ内容の職業技能を備えていないことである。ここでは言語が大きな障碍となっている。朝鮮族農民の多くは日常生活において主として朝鮮語を使用しているため、漢族と同じ職業環境に置かれると強い違和感をもち、なかには一生異文化に適応しきれない者もいる。

外的制約とは言うまでもなく支配民族から受ける制約である。エスニック・マイノリティへの差別や偏見は人類社会の隅々にまで浸透している。程度の差こそあれ、民族間に利害衝突がある度に、エスニック・マジョリティは自分たちの職業を優先して守ろうとエスニック・マイノリティを中心部から周辺へと追い遣ってきた。

第一次調査（1992年夏）を終える段階まで、筆者は対象社会をある程度静止した状態で捉えようとした。つまり、これまでの多くの人類学者によって書かれた民族誌と同じような叙述形式をとろうとした。だが調査が継続されるにつれ、同時進行の社会変化を調査する必要性に迫られた。対象社会は比較的短い調査期間中においても、絶えず顕著な変化を続けていた。このようにフィールドワークによって提示される社会像は、対象社会に関する社会的現実であると同時に、また時間的には調査時現在に属する歴史的現実である。そこで調査者はしばしば2つ以上の異なった歴史的時点における調査結果を対比することによって、対象社会の諸変化を捉えることになる。

第一次調査では、聞き取りや参与観察に基づく諸調査を実施したにも拘わらず、日常生活における村びとの不安な様相はほとんどみられなかった。というのは本論の冒頭でも述べたように、その時点ではいかにして9ヶ月に及ぶ長い農閑期の暇を消化するかが村びとにとっての最大の課題だったからである。第一次調査ではたとえば以下のような観察がなされた。

「川辺屯内の道を歩いていると、必ずどこかの家でマージャンパイを掻き混ぜるジャラジャラという音が聞こえてくる。それも毎日数ヶ所で大勢の人が遊んでいるので、

いつ村を訪れても賭博の光景はみられる。……賭け金のない者は、横で見物するか道端に出ておしゃべりをする。会話の中身といえば、各地で多発する交通事故や強盗事件の話、テレビ番組におけるサッカーの話、親戚訪問先の韓国から帰って来ただれかが裏ビデオをもってきた話、あるいはどこかへ出稼ぎにでも行こうかなど話である。そのほか、半日も道端に座り込んで将棋や囲碁をさしたり、昼間からだれかの家で酒を飲んだりして暇をつぶす者もいる。……マージャンをやらない女性たち（やる者も少なくない）は、洗濯や炊事のほかにおしゃべりを楽しみながら編み物をしたり、幼稚園に入園する前の子どもと遊んだりする。そして夜ともなれば、中国語のわかる中年以下の若い女性たちはテレビドラマをみたり、雑誌や小説を読んだりする。天気の良い日には、広い庭に集まってハルモニ（おばあさん）たちと一緒にカセット・テープレコーダーから流れてくる音楽のリズムに合わせて流行のダンスを踊る。……村では、暇な時間を消化することが仕事以上に大事であるような感じさえ受ける。特に若い男たちは、何か刺激的なことをやって暇な時間をつぶさずには居られない様子である。犬は以前では多くの家で飼われていたが、今はまったく姿を消してしまった。朝鮮族村に犬が1匹たりとも残らなくなった理由は、若者たちが暇つぶしに全部とって食べてしまったからだと言われている。このような状況の下では、北屯の若者たちが退屈なあまりに、石ころを投げつけて目抜き通りの街路灯を全部つぶしてしまったことについても、何だか理解できなくはないような気がした。

ところが、約半年後（1993年春）に再び現地を訪れたときには、村全体がそれまでになかった緊張した異様な雰囲気包まれていた。村びとの動きにも、農閑期にしては随分慌ただしい気配がみられた。具体的にはマージャンをやる人は明らかに減少し、出稼ぎのために村を離れる人が急増した。言うなれば、集団農業から家族単位の請負制農業に移行（1983年）して間もない頃は、生産性の著しい向上により農民の生活は短期間で大きく改善され、しばらくは暇を持て余す時期が続いたものの、筆者が2度目の調査で現地を訪れたときには、暇を持て余す現象はすでに最終段階を迎えていたのである。

近年の急激な経済成長に伴い、日常生活における必需品の価格が急上昇したのに対して米価格は一向に上がらず、農民の貯蓄はとうとう底を突いてしまった。それに、ここ数年は水不足に見舞われ、ほとんど米だけを頼りに暮らしてきた朝鮮族農民の多くは、伝統的な稲作農業をやめて出稼ぎのために都市を目指すようになった。そこで現れたのが第I章3節で取りあげた「出稼ぎブーム」（都市部におけるキムチ商売、国内・国外の韓国系企業における奉公、都市部における朝鮮料理屋の経営）である。

改革開放後に現れた急激な生業構造の変化により、朝鮮族農民の生活はさらに大きく変わろうとしている。異民族社会のなかで、これまでは主として農業生産だけに従事してきたが、近年では農業生産を放棄し、都市へ出かけていった家族員の後を追ひ、家族全員で農村を離れるケースも増えている。やがてかれらは都市の朝鮮族同様、子どもの語学教育をはじめとする少数民族としてのさまざまな心理的葛藤を経験しつつ、いかに異民族社会に再適応していくかで試行錯誤するであろう。

謝 辞

本稿は、博士学位論文『中国朝鮮族の研究——星火村の社会構造と変化——』（1995年9月）の一部を加筆、訂正したものである。拙稿を仕上げるまでに、国立民族学博物館の朝倉敏夫助教授と松山利夫教授から繰り返し丁寧なご指導を承った。合わせて感謝申し上げたい。

文 献

アジア経済研究所

- 1982 『旧植民地関係機関刊行物総合目録（満州国・関東州編及び南満州鉄道株式会社編）』アジア経済研究所。

鄭 吉雲

- 1982 『朝鮮族民俗』（朝鮮語）延吉：延辺人民出版社。

趙 成日等

- 1982 『朝鮮族文学芸術概観』（中国語）延吉：延辺文学芸術研究所。

費 孝通

- 1988 「関与我国民族的識別問題」（中国語）『民族研究文集』北京：民族出版社，pp. 164-170。

樺皮廠鎮誌編纂委員会

- 1986 『樺皮廠鎮誌』（中国語）吉林：永吉県人民出版社。

韓 景旭

- 1994 「中国の朝鮮族（2）——出稼ぎにみる農村社会の変化——」『中京大学社会学部紀要』9(1): 73-101。

- 1995 「中国『内地朝鮮族』のエスニシティ——若者三世の事例を中心として——」『民族学研究』60(3): 249-259。

韓国史料研究所

- 1971a 『朝鮮統治史料（第一巻 間島問題）』韓国史料研究所。

- 1971b 『朝鮮統治史料（第二巻 間島出兵）』韓国史料研究所。

- 1971c 『朝鮮統治史料（第十巻 在外韓人）』韓国史料研究所。

金 炳浩

- 1992 「中国朝鮮族人口の発展と分布の傾向」（朝鮮語）文日煥編『朝鮮学研究』哈爾濱：黒龍江朝鮮民族出版社，pp. 146-163。

金 竹山

- 1993 「中国朝鮮族宗教の源流と歴史的な役割」（朝鮮語）金東和・金承哲主編『当代中国朝鮮族研究——20世紀へ向かって走る中国朝鮮族①——』延吉：延辺人民出版社，pp. 237-258。

金 東和・金 承哲等

- 1993 『当代中国朝鮮族研究——20世紀へ向かって走る中国朝鮮族①——』（朝鮮語）延吉：延辺人民出版社。
- 李 光録
1987 「延辺朝鮮族宗教概況」（中国語）延辺大学民族研究所編『朝鮮族研究論叢（一）』延吉：延辺大学出版社，pp. 237-266。
- 朴 昌昱等
1986 『朝鮮族簡史』（中国語）延吉：延辺人民出版社。
- 朴 奎燦等
1991 『中国朝鮮族教育史』（朝鮮語）東北朝鮮民族教育出版社。
- 末松保和（編）
1972 『朝鮮研究文献目録』東京大学東洋文化研究所。
- 牛丸潤亮・磨憐
1927 『最近間島事情——附露支移住鮮人發達史——』朝鮮及朝鮮人社出版。
- 任 範松等
1989 『朝鮮族文学研究』（朝鮮語）哈爾濱：黒龍江朝鮮民族出版社。